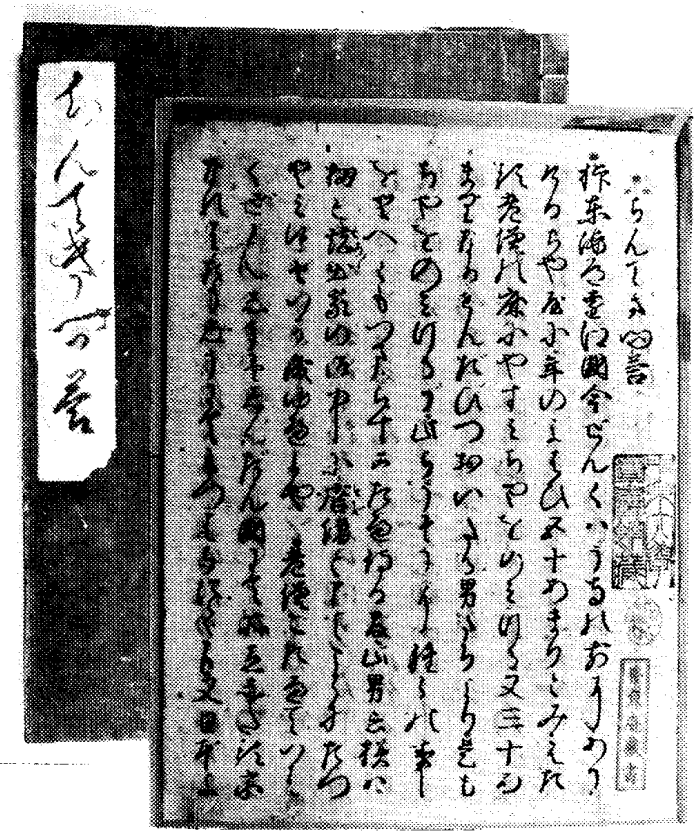
中京大学附属図書館蔵　国書善本解題（増補版）

長谷川端

本解題は、中京大学附属図書館蔵書のうち国書善本に関するものである。善本の選択基準は、一、原則として元和以前の古活字版　二、江戸初期以前の写本　三、稀購本に属する整版　四、その他重要と思われるもの、以上四点による。記載の順は大凡『内閣文庫国書分類目録』によった。

一　塵滴問答　一巻一冊

慶長中刊、古活字版。教訓書。縦二五・二糎、横一九・六糎。藍色卍模様空押し表紙。楮紙袋綴。無界。平仮名交り、毎半葉十一行。一行二十字前後詰、たゞし第二十丁以降は十行。字面高さ約二二・五糎。内題「ちんてき問答」。紙数四十八枚。



『古活字版之研究』九三五頁によれば、小汀文庫旧蔵

の本書は『ぢんてき問答』の最古版で、同書下巻三三七頁一一〇一図に掲載され、『一休水鏡』の第一種本（同書下巻一八三頁五七〇図掲載久原文庫旧蔵の大字本）や『大坂物語』第一種本（国会図書館蔵）等、さらに遡って慶長十一年以前刊の謡本や『伏見常盤』等と同種活字で印行に付されているという。

巻首に「帋魚庵蔵書」「をばま」の二朱印、巻末に「をばま」の一朱印がある。

二　新韻集　　二巻二冊

慶応三年写。縦二五・九糎、横一八・二糎。朱色表紙、美濃紙袋綴、毎半葉七行。字面高さ約二一・五糎。紙数上巻四十八丁、下巻四十七丁。本書は「天保十五年歳次甲辰黄鐘上旬／藤原春村」書写本である。奥書に「慶応二年三月以黒河氏所蔵写了　秋葉義之」とあり、『日本古典全集　新韻集』を見ると、本書が黒河春村書写本であることがわかる。原本である旧阿波国文庫本は昭和二十年夏戦災で焼失したといわれる。

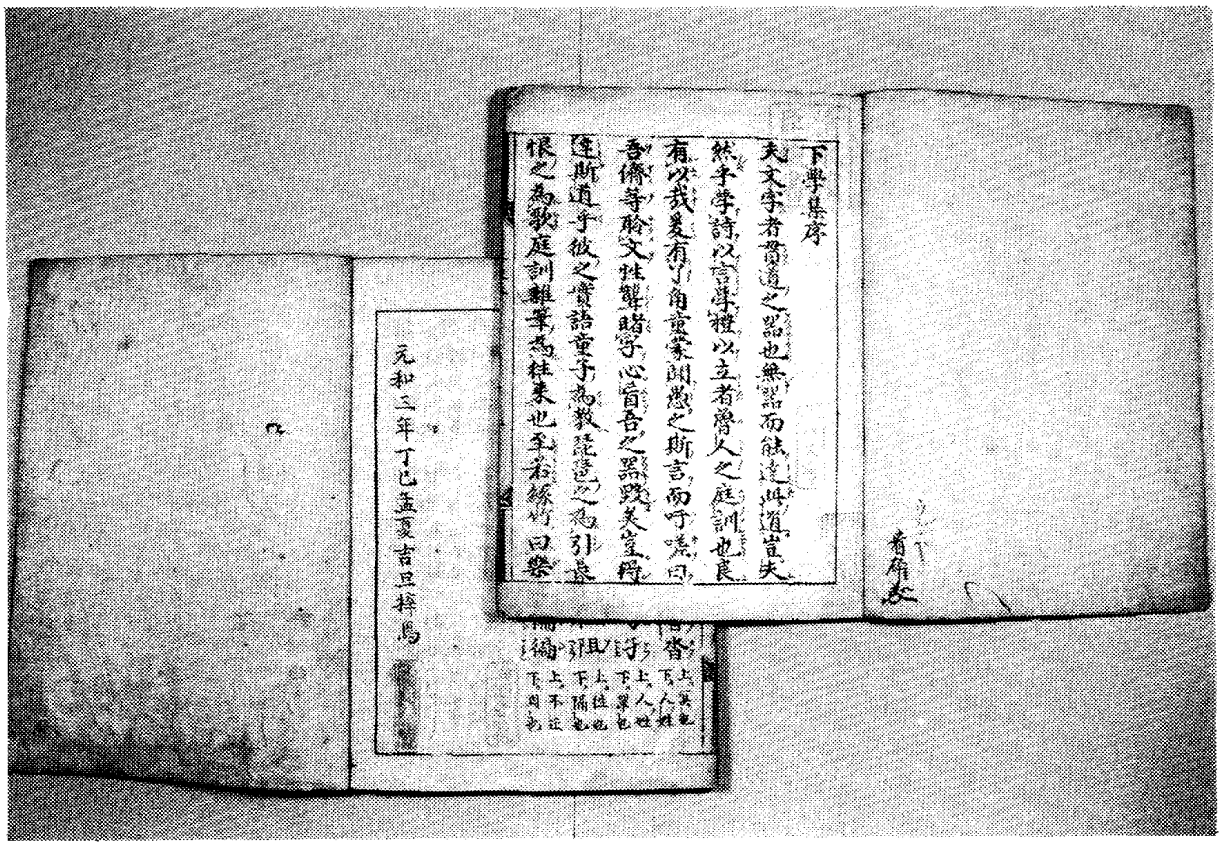
各巻巻首に「秋葉義之之印」・「青谿書屋」（大島雅太郎）・「岡田真之蔵書」の三朱印、見返しに「下総崎房／秋葉孫兵衛蔵書」朱印がある。本書は漢詩を作るための仮名引きの漢字辞書であるが、当代の国語

資料として貴重である。編者は、紀行『梅花無尽蔵』を著わしている相国寺の僧万里集九（正長元年一四二八～文亀二年一五〇二以後に没す）と言われるが、彼は旧阿波国文庫本の所持者に過ぎないとも考えられており、成立の過程についてもなお疑問の点が多い。

三　下学集　　二巻二冊

元和三年刊、古活字版。縦二八・二糎、横二〇・二糎。栗皮色表紙、楮紙袋綴。四周単辺。毎半葉七行。一行十八字詰、細字双行。版心「下学之上（下）（丁数）」。紙数上巻三十一丁、下巻四十九丁。刊記「元和三年丁巳孟夏吉旦梓焉」。『古辞書の研究』六五四・五頁によれば、本書は元和三年杉田良庵開板本の覆刻本である。原刻本は右の刊記の次に、別行で「杉田良庵玄與開板」とある。この覆刻本は原刻本からさほど隔らぬ時期の印行という。同種本は宮内庁書陵部・九州大学国語研究室・無窮会文庫等にある。

各冊巻首に「清水浜臣蔵書」・「酒竹文庫」（大野酒竹）の二朱印、巻末に「泊洒舎蔵」朱印がある。


下學集序
夫文字者貫道之器也無器而能道此道豈失
然予學詩以言學禮以立者魯人之庭訓也良
有以我爰有丁角童蒙聞愚之斯言而吁嗟曰
吾儕等聆文性鑿暗學心盲吾之器踐矣宜將
至斯道乎彼之實語童子為教疑道之為引長
恨之為歎庭訓雖等為往來也至若緣竹曰樂
元和三年丁巳孟夏吉旦梓焉

四　増補節用集　七冊

寛文五年刊。縦二六・七糎、横一九・四糎。紺色原表紙。題簽「真草　増補大節用集」楮紙袋綴。四周単辺。版心「大節用　丁数」毎半葉七行。

次の刊記あり。

寛文五年乙巳林鐘吉日
二条通正行寺町
武村三良兵衛刊行

五　鼇頭節用集　合一冊

貞享五年刊。縦二六・四糎、横一八・八糎。茶褐色原表紙。題簽欠落。内題「鼇頭節用集」。楮紙袋綴、四周単辺。版心「節用大全　丁数」毎半葉有界七行。「貞享五年龍次戊辰仲夏／望月　採毫千哲齋」の序あり。刊記は「貞享五戊辰歳七月吉日／松会朔旦開板」である。巻頭に「欣魚荘文庫」朱印あり。

六　増益節用集大全　一冊

寛文頃刊。縦二七・三糎、横一八・八糎。紺色原表紙。題簽欠落。内題「頭書増補節用集大全　二行両點」。楮紙袋綴。四周単辺。版心「節用上（中・下）　丁数」。毎半葉有界七行。

刊記なし。最終丁ウ天に「寛永元甲子三月　ヤギ福田性」と墨書あり。

七　伊勢物語聞書　一冊

江戸初期（慶長・元和頃か）写。縦二六・一糎、横二〇・一糎。紺色改装表紙、楮紙袋綴。題簽欠落。内題に「伊勢物語聞書」とあり『伊勢物語肖聞抄』である。毎半葉十行。一行二十字前後、平仮名交り。字面高さ約二〇・五糎。墨付紙数一一九丁。続群書類従本（第十八輯下）に比較して仮名が多い。冒頭、

一、此物語を伊勢といへる事こちうの義にはなんによの物かたりといへりそのゆへは伊勢の二字をおとこをんなとよむによれりといへりそのしもにしゆしゆの儀をたつたうりうに不用之

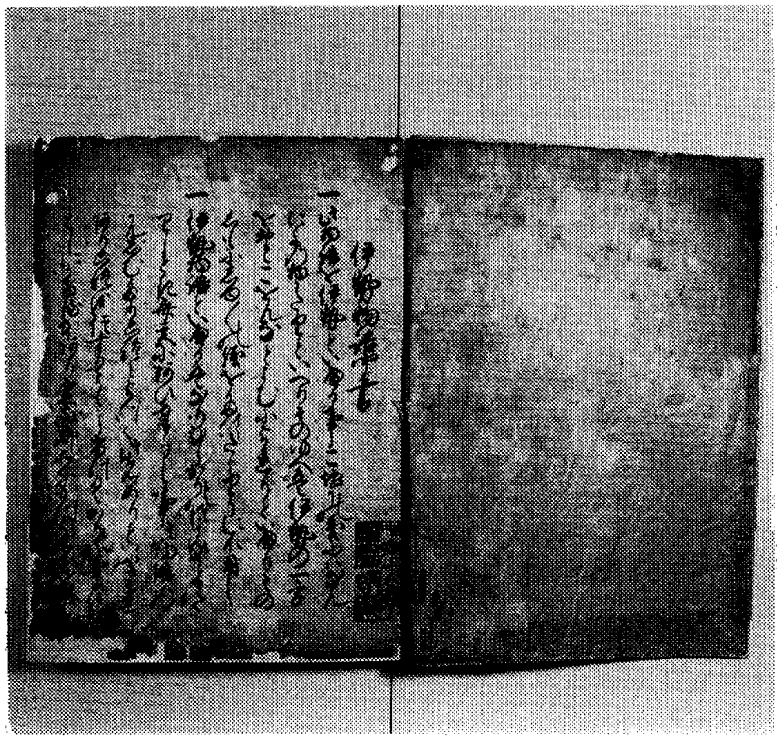
とあり、「定家卿の奥書に無所見故也」を欠く。巻末は

一、むかしおとこわつらひて　辞世の時なるへし
つゐに行道とはかねて聞しかと昨日けふとは思は

さりしをといひて心はあまりて詞はたらすのことはりを付侍り如何当流の心はうちまかせて昨日けふとは思はさりしをと世間の理をよめると聞侍りし

とあり（一一八ウ）、余白の後に「秀嶋大清ェ門」と本文と同筆の署名がある。

次に、本来は裏表紙にあたる一一九オに次のような識語がある。



右一冊者予講尺時肖柏禅翁聞／書也加一見少々遇不及之所を置侍る者也／大概無子細者歟まことは此物語の心を註し／侍らん事は多あるましきことになむ其／故は心あまりて詞はたらさるの理也

さらに、一一九ウの中央に「いせものかたり」とあり、左下に〈カ三郎□と墨書が存する。猶『肖聞抄』は宮内庁書陵部肖柏奥書本、学習院図書館蔵肖柏自筆本など、『国書総目録』によれば十八本の写本を数える。

八　闕疑抄　　五巻合一冊

寛永十九年刊。縦二七・二糎、横一九・一糎。黄緑色原表紙。題簽「闕疑抄」。内題「闕疑抄巻第一～（巻第五）」天地単辺。二十二・四糎。版心「闕疑一（～五）」毎半葉十二行、一行二十二字詰。巻末に天福本の奥書を刻す。

刊記次の通り。

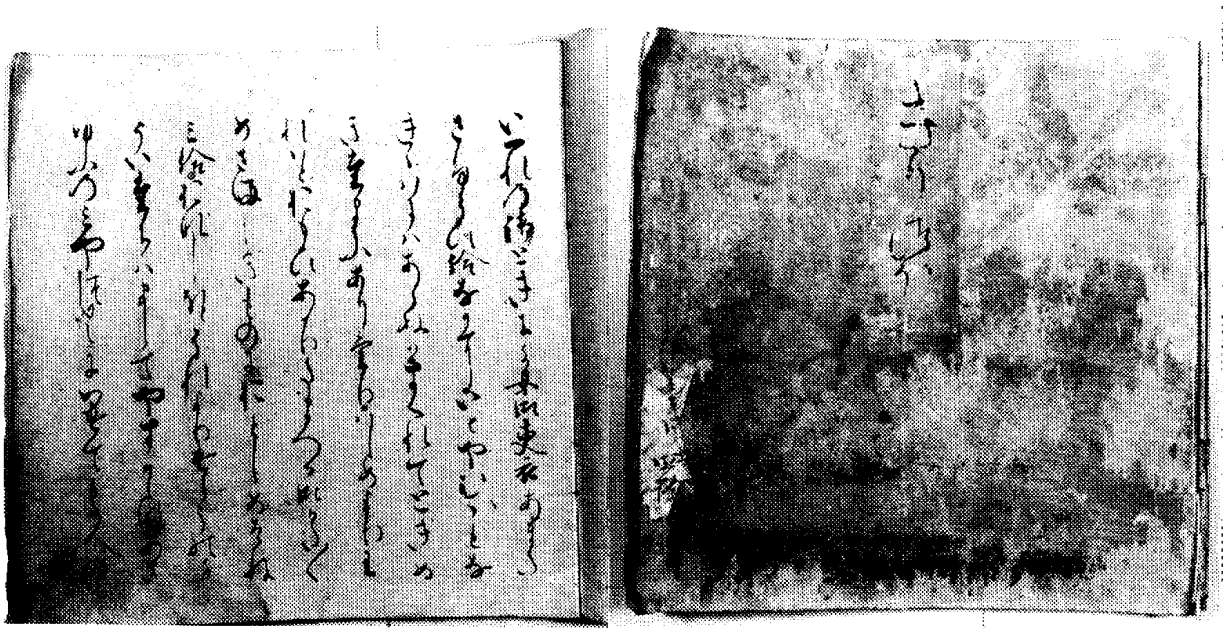
寛永十九壬午歳孟春吉辰　二条通観音町　　新板

風月宗智刊行

九　源氏物語　　五十四巻存五十三帖

南北朝期写。縦一七・四糎、横一六・五糎。表紙は鳥の子厚様、金銀泥で各帖の巻名にちなんで山水・花鳥・草木、または葦手・雲形などを描き、切箔を置く。表紙の端に巻子本のように細竹を立てた巻もある。鳥の子紙列帖装。毎半葉九行。筆者不詳。数帖補写あるも、ほぼ同時代と推定される。全帖河内本。大島雅太郎氏、小汀利得氏旧蔵本。時代倹鈍箱入り。

池田亀鑑『源氏物語大成・巻七研究資料篇』二五〇～二五二頁に、本書について「朱の声点・句点など入念に生された稀有の美本である」と言い、また、「この本の系統は河内本であるが、耕雲本を通過したものでないところに、その絶大な価値が存する。戦後この本が佚亡せず、完き姿をとゞめ得たことは慶賀に堪へない。」とある。ただ残念なことに須磨巻を失っている。なお、『源氏物語大成』が校訂に使用した大島本の中の河内本ではない（『源氏物語事典』下巻諸本解題の記述は誤っている）。



一〇　源氏物語　四巻五冊

室町末期写。縦一九・八糎、横一五・一糎。原装茶染表紙、題簽は「わかな　下」（「下」の文字は少々削られている）と「さわらひ」の二冊のみ存。列帖装。本文鳥の子薄様紙。毎半葉十行。一行二十三～二十五字。字面高さ一五・五糎。紙数は若菜上一〇五丁、遊紙尾五丁、若菜下一〇四丁遊紙尾二丁、橋姫三一丁遊紙尾二丁、総角八四丁遊紙首一丁、早蕨一七丁遊紙尾二丁である。

池田亀鑑著『校異源氏物語』と対校すると、別本系の麦生鑑綱筆本（桃園文庫蔵）や阿里莫神社旧蔵本（桃園文庫蔵）に近い本文かと思われる。朱点・識語等なし。印記なし。

一一　源氏物語　一冊

江戸初期写。縦一六・四糎、横一七・二糎。原装紺表紙。題簽は「とこなつ」、卍文に金箔を押す。列帖装・本文鳥の子紙。毎半葉十一行。一行十八～二十一字。字面高さ一三・五糎。紙数二三丁。遊紙首一丁、尾一丁。尾遊紙裏に「藤原季有書之」とあり。

一二　源氏物語　二十五冊

明暦頃刊。縦一六・一糎、横一〇・八糎。香色厚表紙。原題簽「桐壷　箒木」～「目案　下」。第一冊「桐壷・箒木」、第二十冊「手習・夢の浮橋」、他に「山路

のつゆ　系図」「引歌」「目案 上（中・下）」、全二十五冊、楮紙袋綴。四周単辺。毎半葉十一行。一行二十字詰。字面高さ一一・八糎。第一冊に墨書書込み多し。倹飩箱入り。

一三　源氏秘抄　　十一冊

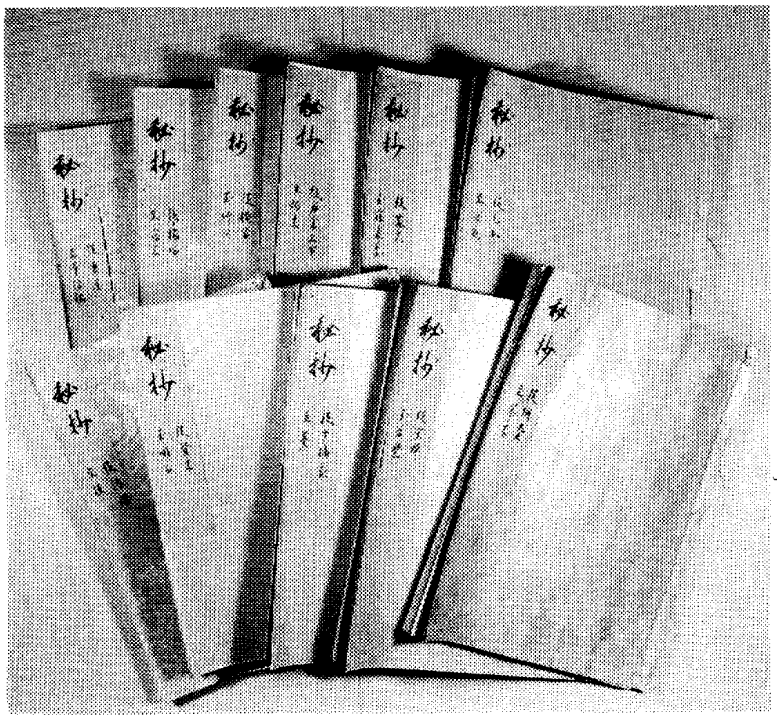
江戸初期写。縦二七・六糎、横一九・八糎。第一・第六・第十一冊は布目黄色表紙、他は薄香色表紙。草花・瑞雲模様。薄様袋綴。毎半葉十二行。字面高さ約二一・五糎。題簽は第一冊「秘抄　従桐壷　至箒木」第十一冊「秘抄　従東屋　至夢浮橋」の如くである。

本書は桐壷以下夢浮橋までの重要な語句を抜いて注釈を加えた、三条西公条の『細流抄』第二次本であり、京都大学図書館蔵『秘抄』と同じく、左記の三つの奥書を有する。

①此一部永正十年受庭訓畢彼聴書詞短心不足更／非可令外見不能清書送数年半為蠢魚巣爰或人難去所望之間如形加清書終一部之功参差／漏脱之事繁多歟重而可加潤色而已／于時大永第八仲春十九日

②此聞書全部先年所令書写之一本不慮失火無念重而／所望之由懇切之厳命難黙止之間卒尓馳禿筆／狼籍無極曽以不可見他見者也／天文甲午暦千秋佳節終功了／亜三台都督郎在判

③此抄胸臆之愚公条卿卒尓之聞書也先年達能州刺／史之聴寄紙懇望不獲止写送之処不慮之災失却／無念重而来之間終書功云々一見外題染老筆穴賢／可被禁他見而已／天文甲午暦冬至日　八旬老衲　在判



一四　狭衣物語　十六冊

承応三年刊。縦二三・一糎、横一六・〇糎。原装紺色草花模様表紙。原題簽「さころも一之上（〜四之下）」（第一冊「目録并年序」の題簽は下半分欠落）。内題「狭衣巻第一之上（〜第四之下）」「狭衣系図」。四周単辺。匡郭縦一六・五糎、横一一・二糎。版心「狭衣一之上（〜四之下）　丁数」。楮紙袋綴。毎半葉十一行、一行二十一字詰。漢字平仮名交り、挿絵多数。

各冊巻頭天に「柳園書室」の朱印、巻末に「依平蔵書」（石川依平）の朱印あり。

「狭衣系図」終丁オに

斯さころもの系譜は西三条逍遙院
入道堯空尊者の御作云〻尤精撰なる
へしこのころ他本をあつめ校合するに
展転書写のあやまりに損落の文字
又前後の錯乱ありて是非をわき
まへかたきところとこころ本書に考合て清
書せしめ旱干時承応甲午歳仲
夏日東京黄台山釈野切臨叟誌之

とあり、ウに次の刊記あり。

承応三甲午歳季秋吉辰
小川通一条上ル町
田中理兵衛板行

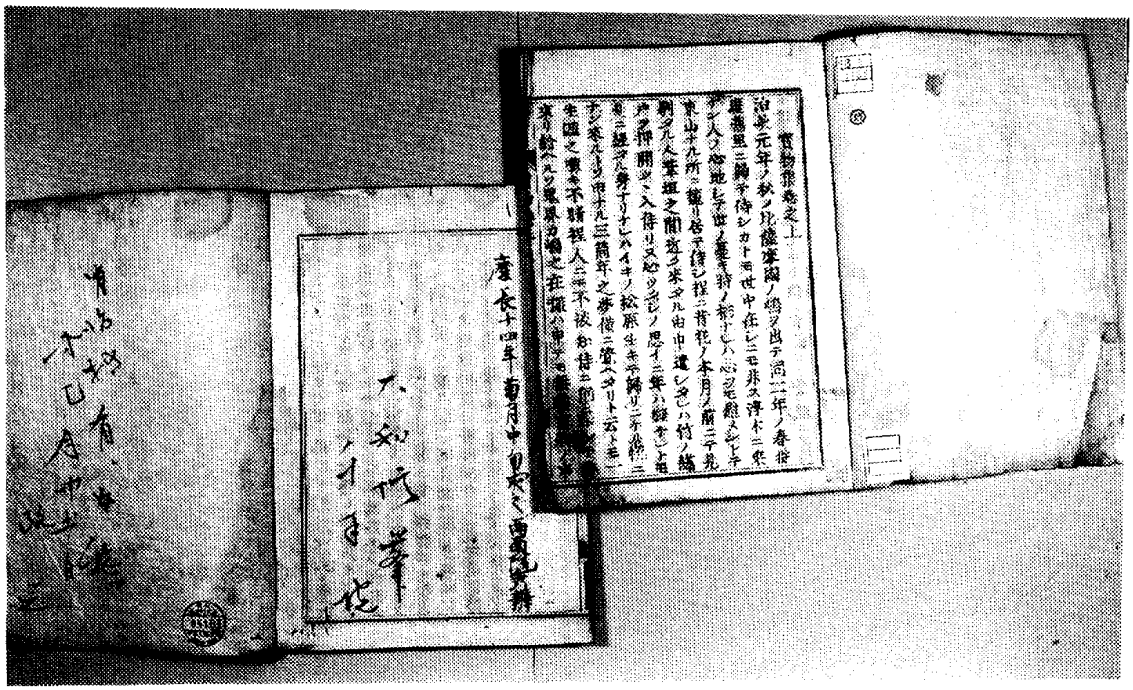
一五　宝物集　三巻存二冊

慶長中刊、古活字版。中巻欠。縦二七・七糎、横一九・九糎。薄茶色原表紙。題簽欠。楮紙袋綴。四周双辺。毎半葉十一行、一行二十二・三字詰。仮名交り。版心「宝物巻幾（丁数）」。紙数、上巻四十七丁、下巻四十八丁。

『古活字版之研究』上巻によれば、本書各巻末の墨書識語「慶長十四年菊月中旬求之西南院秀辨」とあるをもって、慶長十四年以前の印行と判断される。

本書は宝物集の最古版で、仮名交りの古拙な版式を見せている。右の識語の他に、「和州信貴山／千手院」（上巻）、「大和信峯／千手院」（下巻）の識語並びに「明治拾有五稔／未巳月申上日／政之」の墨書が下巻にある。また表紙右上に「共貳」とあり、同筆で右下に「和州信貴峯／千手精舎／坤室」（上巻）、「千手精舎／坤室」（下巻）とある。高野山西南院より信貴山寺千手院に移った時には既に中巻を失っていたものと思

われる。同種本は静嘉堂文庫他四箇所にある。



一六　栄花物語　二十一冊

明暦二年刊。縦一五・九糎、横一一・〇糎。原装紺色網目表紙。原題簽「栄花物語　月のえん　花山　一」から「栄花物語　ぬの引のたき　むらさき野　廿終」（目録は題簽欠落）。内題は各巻名。四周単辺。楮紙袋綴。

刊記次の通り。

本云

斯栄花物語赤染衛門述作

なり尤至宝なる物なるへし

このころ数本をもて比校するに展

転模写のあやまりに損落の文字

前後の錯簡是非をわきまへかた

き處々本書に考合清書せしめ早

明暦第二丙申季暮秋吉旦

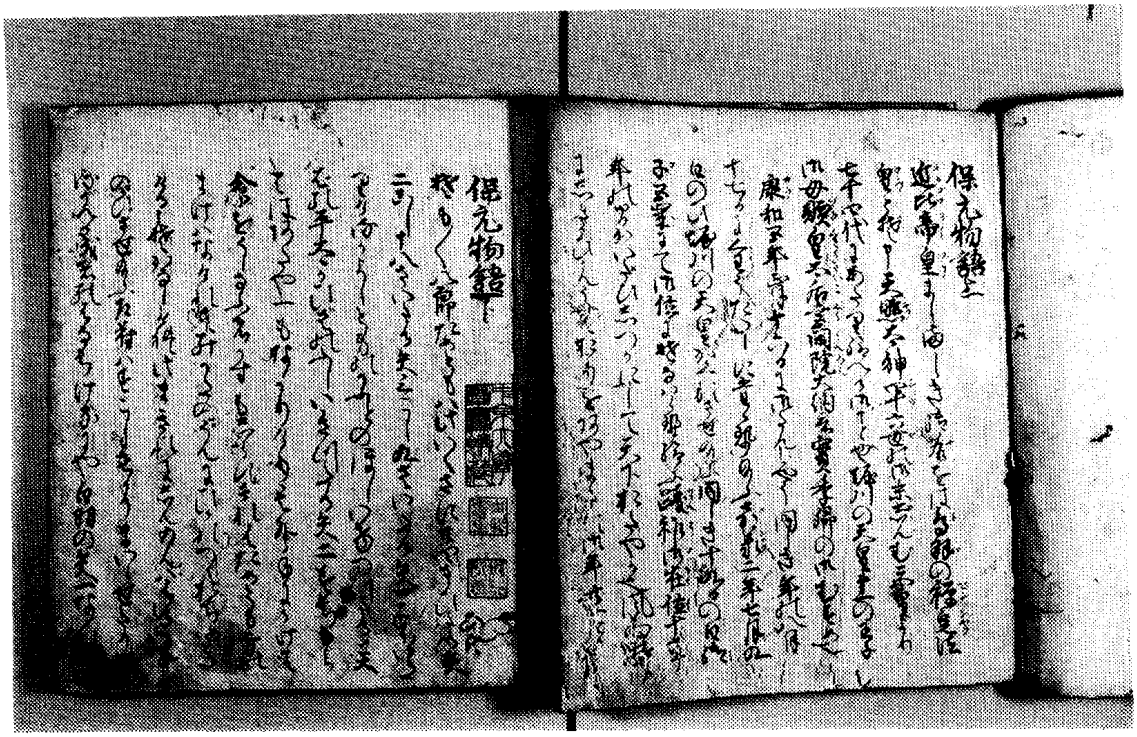
洛陽今出川林和泉掾　板行

各巻巻頭に「石原蔵書」「呉邨文庫」「岡田真」の三朱印あり。

一七　保元物語　二巻二冊

室町末期写。縦二八・一糎、横二四・四糎。茶褐色表紙、楮紙袋綴。毎半葉十一行。一行十九〜二十二字。

字面高さ二四・〇糎、平仮名交り。表紙中央に「保元物語上（下）」の題簽がある。墨付上巻八十八丁、下巻九十七丁。上巻第一紙に皇帝系図、同巻末に源氏系図がある。目録・章段なし。金刀比羅本系統に属し、上巻は「近比帝王ましまし御名をは鳥羽の禅定法皇とぞ申天照太神四十六世の御末じんむ天皇より七十四代にあたり給へる御かと也堀川の天皇第一の王子御母贈皇太后宮閑院大納言実季卿の御むすめ也」に始まり、「其中に八郎ためともたゝ一き引残てちかつくものあらはいころさんとしきりに跡をかへりみてしつしつと落行けれ共おうべき者もなかりければはるかにのびたりけるが又とつてかへしてはせ来りてうわ矢のかぶらの一すち残たりけるを末代のものにみせんとてほうしやうごんゐんのもんのはしらにいとゞめてぞかへりける」で終る。下巻は「そもそも八郎ためともは此いくさに廿四さひたる矢二こし十八さいたる矢三こし九さいたる矢一こしいたりけるかよしとものかふとのほしいけつつたると大ばの平太かひざのふしいきつたる矢二すちならてはあたや一もなかりけり其外手にかけて命をうしなふ者かすもしられすされはためとも方のまけはなけれ共みかたのうんにひかれつゝおちゆきけるこそかなしけれ」で始まり、「そもそもにんわう七十七代



のあひだこうしのかつせんかずをしらずといへともくわうにんてんわういぜんはくわうとを心にまかせもといを一所にさためられすくわんむてんわうのきようにていじやうをこの地にしめへいあんじやうとかうせしよりこのかたせいざう三百七十よくわひされともふしきやうだいりやうはうにわかりくわうきよせんとうにぐんぢんしわうじやうをせんちやうとしきうもんにちをながす事せんぜうこれま□なりしかれは智将をのをのちからをつくししそつおほくしないすをきとことくたいさんしわうくわんみな身をあはすきたひふしぎのぎひやうなり」で終る。平仮名の附訓は本文と同筆であろう。

「堀部所蔵」・「青谿書屋」・「赤木文庫」（横山重）の三朱印がある。

一八　平家物語・如白本　　十二巻存四巻

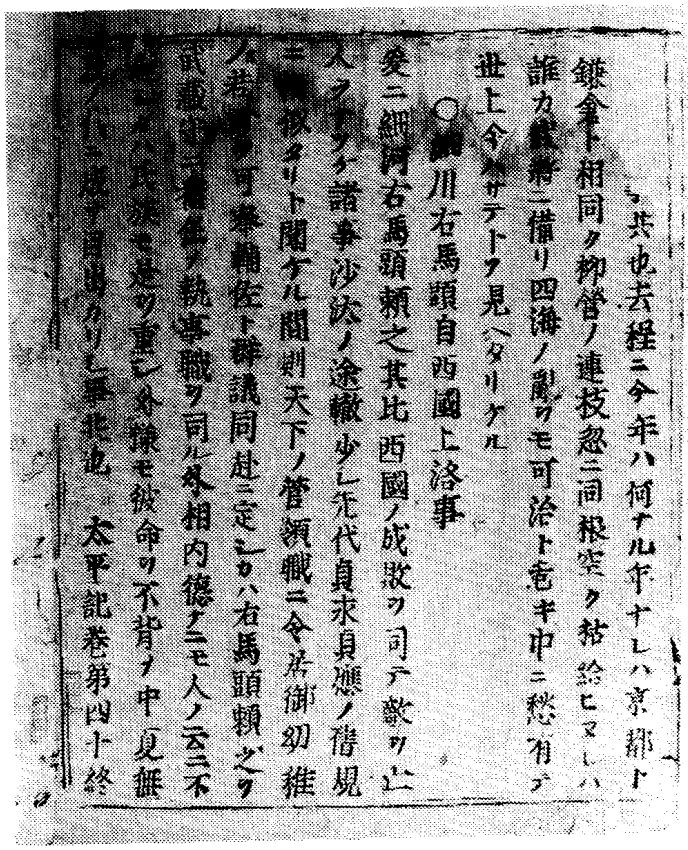
江戸初期写、楮紙袋綴。縦二八・八糎、横二〇・二糎、一面十行漢字片仮名交り。

本書は、数多い『平家物語』写本の中で、高橋貞一氏『平家物語諸本の研究』によれば、八坂流系統の丙類に属し、目録は水戸彰考館に蔵する如白本と全く一致する。川瀬一馬氏旧蔵本である。巻一の見返しに、高橋貞一氏筆の「覚」（昭和十六年十一月十六日識）

を貼添、最終丁裏に旧蔵者川瀬一馬氏の識語（昭和二十八年八月十五日）あり。

一九　太平記　四十巻二十冊。

慶長元和中刊、古活字版。縦二六・八糎、横一九・二糎。栗皮色原表紙、楮紙袋綴。四周双辺、毎半葉十二行。二十～二十二字詰。片仮名交り無訓本。

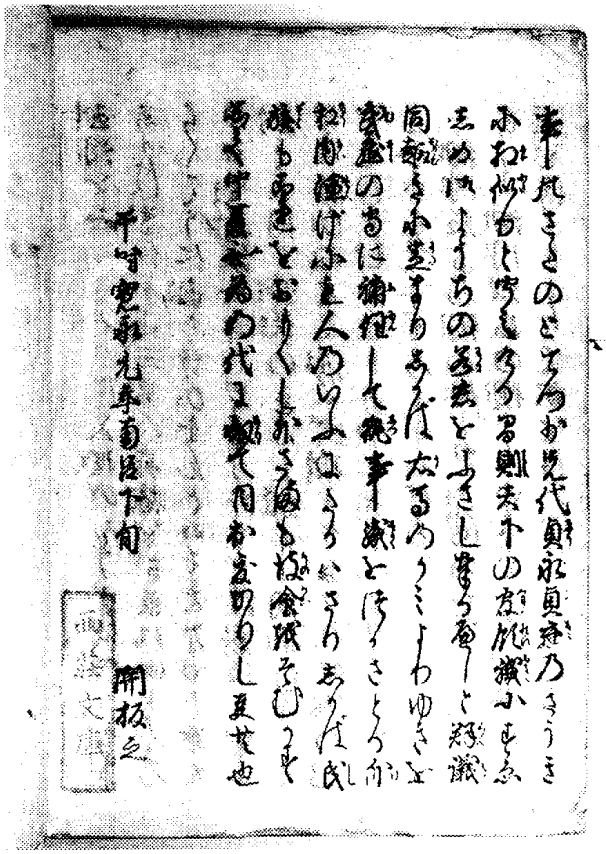


『古活版之研究』下巻三一五頁九四四図に掲載する久原文庫旧蔵本と同じ慶長元和中刊の別版本である。

二〇　太平記　四十一巻四十一冊。

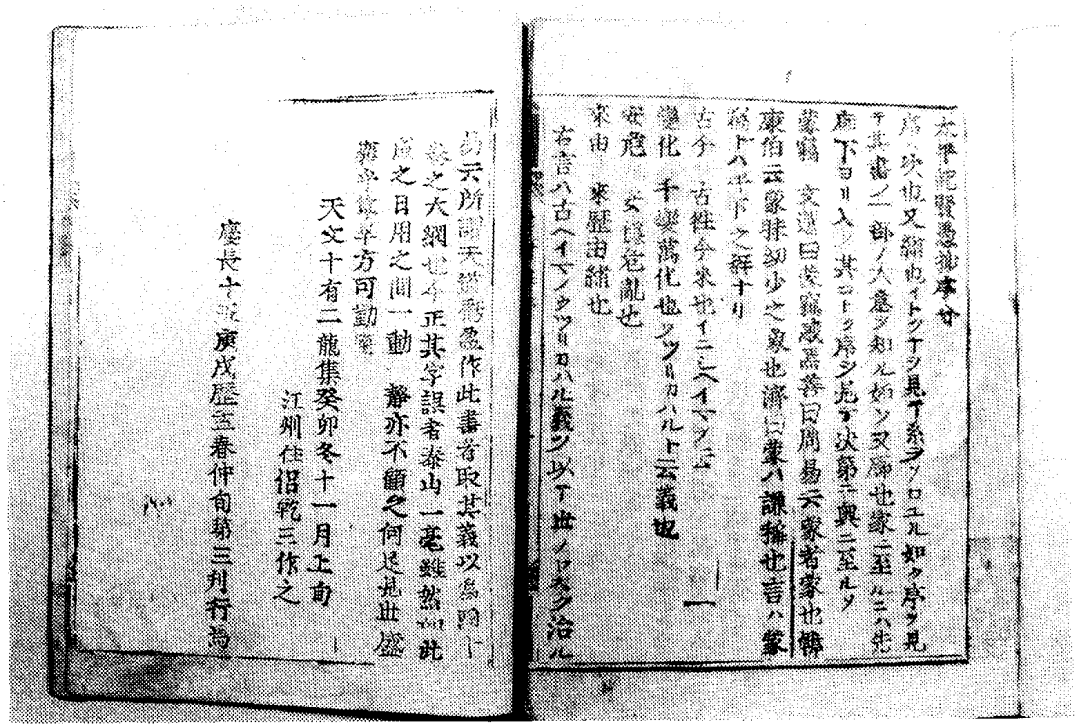
寛永元年刊、古活字版。縦二八・四糎、横二〇・二糎。茶褐色表紙、原装・原題簽付。楮紙袋綴。無辺無

界。毎半葉十一行。一行十九〜二十字詰。附訓平仮名本。刊記「于時寛永元年南呂下旬　開板之」。太平記の平仮名古活字版は(1)慶長十四年刊本（存庵開板）、(2)寛永元年刊本(3)慶安三年刊本（「慶安三年庚寅五月吉日荒木利兵衛開」）の三種のみである。いずれも振仮名附活字を使用している。巻四十巻末に「西荘文庫」の朱印、目録表紙に同朱印を押した紙片が貼添されている。



二一　太平記賢愚抄　四十巻二冊

慶長十五年刊、古活字版。縦二八・七糎、横二一糎。



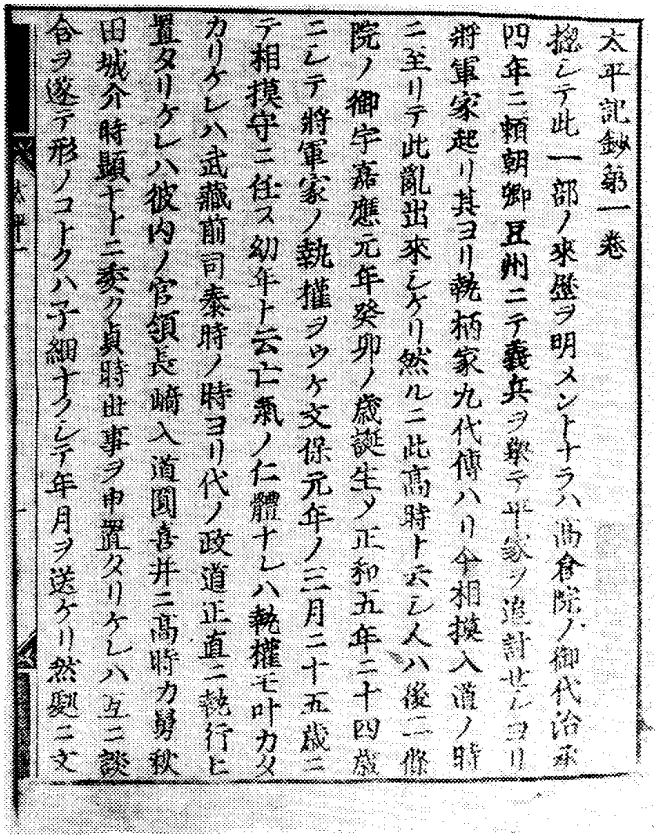
茶褐色表紙、楮紙袋綴。四周双辺。毎半葉十二行、一行二十〜二十一字詰。版心「太平記注幾（丁数）」。紙数上巻七十三丁、下巻六十五丁。刊記「天文十有二龍集癸卯冬十一月上旬／江州住侶乾三作之／慶長十五庚戌歴孟春仲旬第三刊行焉」。『太平記賢愚抄』の初刻は慶長十二年医徳堂守三刊本で、本書は再刻本であり、同種のものは刈谷市立図書館村上文庫、蓬左文庫その他にある。

二二　太平記鈔　四十巻存四冊

慶長中刊、古活字版。縦二八・二糎、横二〇・四糎。茶色表紙、楮紙袋綴。四周単辺、無界。毎半葉十二行。一行二十五字前後詰。版心「太平幾（丁数）」。『古活版之研究』では慶長十五年春枝開板の太平記と同種活字で印行していることを以て本書を慶長十五年刊とする。本書は八冊のうち四冊（巻十より巻二十四まで）を欠く。慶長中刊本（川瀬氏による慶長十五年刊）には二種あり、本書は蓬左文庫本と同じく第二種に属する。

第二種本は、例えば第一冊太平記鈔第二巻十七オ12行一七大寺　東大寺聖武帝神亀五年始造之○興福寺のように、第一種本に比べて行全体を一字あげて寺院名の前に○印を挿入している。十七ウでは○印が元興

寺以下五ケ寺の前に挿入されている。つまり、同一頁の中での操作が見られるのである。


太平記鈔第一卷
拠シテ此一部ノ來歴ヲ明メントナラハ高倉院ノ御代治承
四年二頼朝卿豆州ニテ義兵ヲ擧テ平家ヲ追討セシヨリ
將軍家起リ其ヨリ執柄家九代傳ハリ今相摸入道ノ時
ニ至リテ此亂出來シケリ然ルニ此高時ト云シ人ハ後二條
院ノ御宇嘉應元年癸卯ノ歳誕生ノ正和五年二十四歳
ニシテ將軍家ノ執權ヲウケ文保元年ノ三月二十五歳ニ
テ相摸守ニ任ス幼年ト云ヒ氣ノ仁體ナレハ執權モ叶カタ
カリケレハ武藏前司泰時ノ時ヨリ代ノ政道正直ニ執行ヒ
置タリケレハ彼内ノ官領長崎入道圓喜并ニ高時カ舅秋
田城介時顯ナトニ奏ク貞時出事ヲ申置タリケレハ五ニ談
合ヲ遂テ形ノコトクハ子細ナクシテ年月ヲ送ケリ然與ニ文

二三　太平記音義　二巻合一冊

慶長中刊、古活字版。縦二八・八糎、横二〇・九糎。茶色表紙、楮紙袋綴。四周単辺、無界。毎半葉十二行上下二段組。版心「太平記音義上（丁数）」。紙数上巻四十四丁、下巻四十二丁。『古活字版之研究』は太平記鈔と同じく慶長十五年刊とする。巻首に「斑山文庫」

太平記音義第一卷并序
一蒙　モウ
一南菜　ナンサウ
一紂　チウ
一趙高　テウカウ
一鳳翔　ホウシヤウ
一覬覦　キイハ　トキノコエ
一鹽船　ウンシヤウ
一雑掌　ザイキ
一奔竟　ハイスウ
一蓬蒿　ホウカウ
一兩陽　テウヤウ
一殷　イン
一牧　ボク
一樓山　ロウサン
一狼煙　ラウエン
一猜　サイ
一八差　ハツクワツ
一錯玉　チヨウリウ
一警衛　ケイエイ
一警策　ケイサク
一長禄　チヤウロク

（高野辰之）・「宝玲文庫」（フランク・ホーレー）の二朱印がある。

二四　湊川物語　　三巻三冊

寛文頃刊。縦二七・二糎、横一九・一糎。藍色無地原表紙（一部改表紙）。題簽欠。打付書「湊川物語・上（中・下）」。楮紙袋綴。四周単辺。毎半葉十六行、一行二十九字詰。版心「楠巻四（巻五・巻六）　丁数」紙数巻四は二十一丁、巻五は十七丁、巻六は二十二丁。挿絵は巻四に四面（うち見開き三面）、巻五に五面（うち見開き二面）、巻六に六面（うち見開き二面）。刊記なし、下巻巻末に「通油町／本問屋開板」

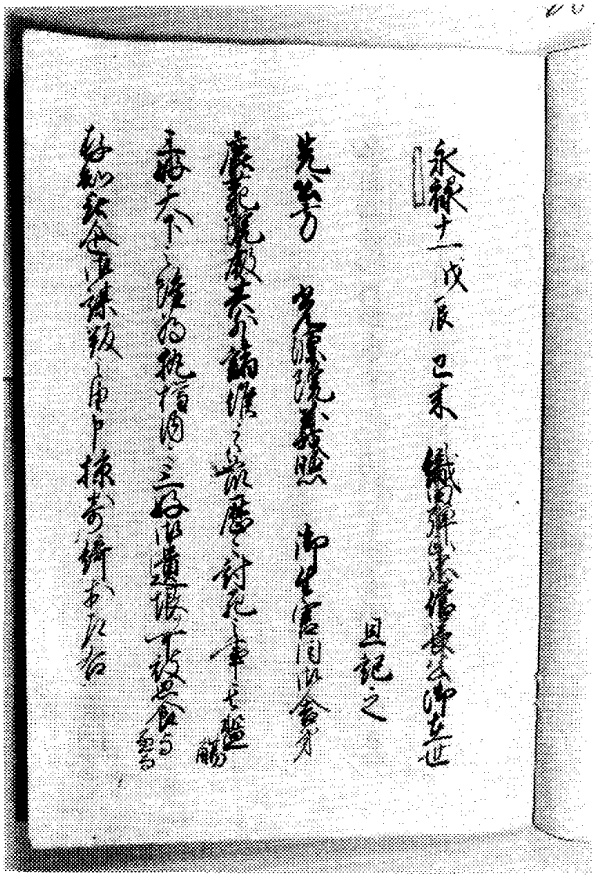
本書は『太平記』（流布本）巻十五の第五章段以降と巻十六から楠正成関係の章段を抜萃し、さらに巻二十三の冒頭章段「大森彦七事」を付加して二十一章段とし、三巻に分割したものであり、平かなを多くした文に直してある。

二五　曽我物語　　十二巻十二冊

江戸初期（寛永頃か）写。縦二九・八糎、横二〇・五糎。紺色表紙、金泥による草花模様。鳥の子袋綴。毎半葉十一行。一行二十三〜二十五字。字面高さ約二十三糎。流布本。識語・奥書なし。箱入り。

二六　信長記　十五巻十五冊

江戸中期写。縦二八・〇糎、横一九・四糎。原装渋皮表紙、銀泥による草花模様を描いた原題簽に「信長記　第一之巻（〜第十五之巻）」とある。楮紙袋綴。毎半葉六行、一行十九乃至二十字。字面高さ約二十二・三糎。本書は岡山大学蔵太田牛一自筆本の忠実な転写本である。箱の表中央に「信長記　太田和泉守覚書」とあり、箱裏に「信長記十五巻／梅本治部右衛門所持／享保十九甲寅春筋誠矩永丈以人購之」と墨書。



二七　関原軍記　六巻六冊

江戸中期写。縦二三・六糎、横一七・八糎。原装亀甲文様樺色表紙、金箔散し。見返しは銀泥に金箔散し鳥の子。本文鳥の子紙列帖装。原題簽「関原軍記　一（〜六）」（第三巻のみ題簽を欠く）。漢字平かな交り、毎半葉九行。一行十四〜十六字。字面高さ約十九糎。第一巻は「秀吉公六十余州退治之事」から「石田治部少輔三成反逆之事」まで、第六巻は「浮田中納言父子流刑之事」から「日本六十余州氏姓之事」まで。八十五章よりなる。

二八　文正草子　合一冊

寛永頃刊。縦二七・〇糎、横一九・〇糎。紺色無地原表紙。改題簽「ふんしやうのさうし　上（下）」。内題「ぶんしやうのさうし　上（下）」。楮紙袋綴。毎半葉十一行、一行二十一〜二十三字詰。匡郭なし、字面高さ二一・六糎。紙数上巻二十四丁、下巻三十一丁。挿絵上巻六面、下巻七面、いずれも素画である。本書は赤木文庫旧蔵本で、『室町時代物語集』第五の解題および図版によれば、寛永版である。

二九　御伽草子　二十三巻二十三冊

宝永・享保頃刊。御伽文庫本。縦一六・〇糎、横二

二・九糎。紺色表紙、草花・鳥・虫模様。中央に題簽（縦十一・四糎、横三・二糎）に「文正さうし　一」のようにある。

渋川称觥堂柏原屋清右衛門（大坂心斎橋筋順慶町北江入）の書目に

御伽文庫　いにしへのおもしろき艸紙をことことくあつむ　箱入　廿三冊

とあるもので、倹飩箱（高さ三一・四糎、幅二五・五糎、奥行一九・五糎）に入っている。「御伽文庫」とある。題簽を写すと、文正さうし・はちかつき・小野草帋・御曹子しま渡・からいとさうし・こわたきつね・なゝくさ草紙・さる源氏艸紙・ものくさ太郎・さゝれいし・蛤の艸紙・こあつもり・二十四孝・ほんてん国・のせさるさうし・ねこのさうし・浜出草紙・いつみしきふ・一寸法師・さかき・浦嶋太郎・よこ笛艸帋・しゆてん童子、以上である。東京大学国文学研究室蔵本の「しゆてん童子」の終りには

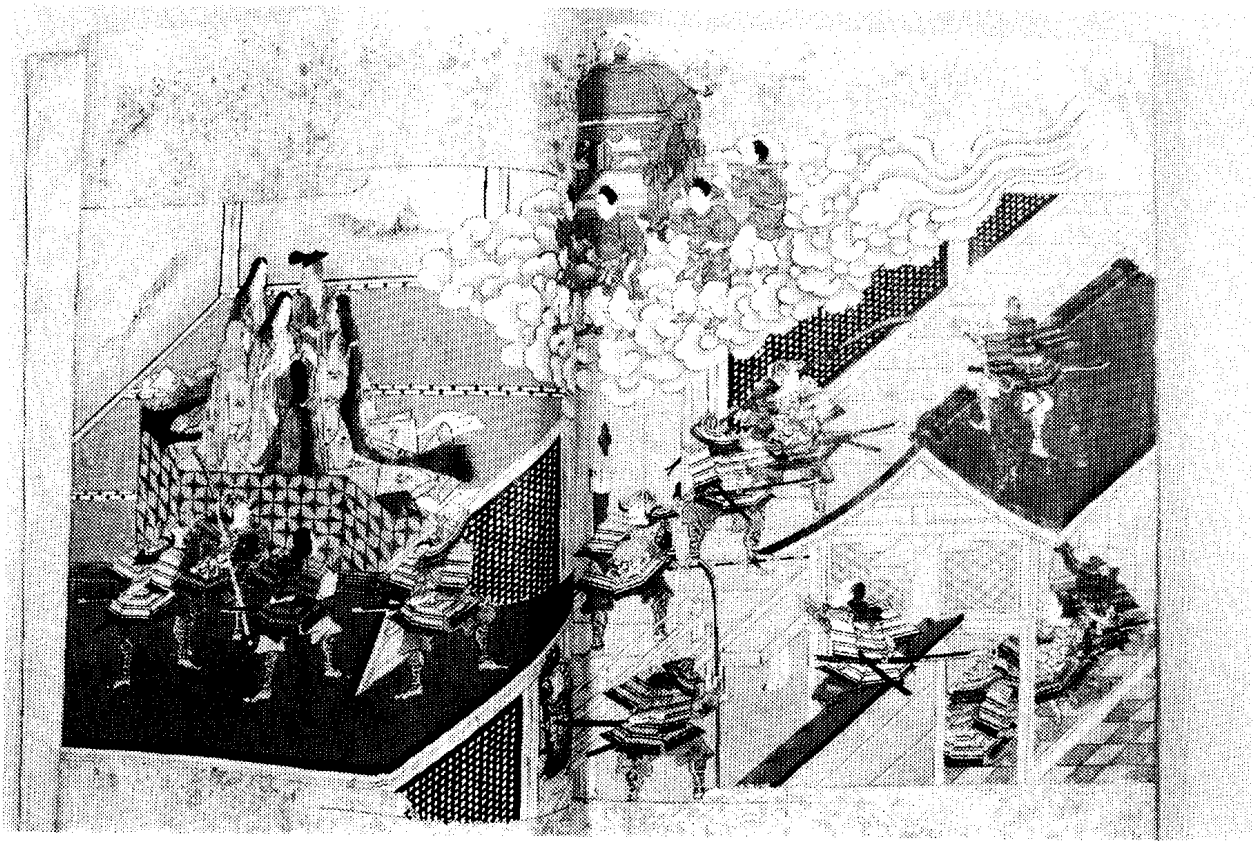
大阪心斎橋順慶町書林　柏原屋清右衛門

の刊記がある由であるが、本書のように刊記のないものも存する。二十三編のあるものは寛文あるいはそれ以前に出版されていたらしいが、揃い本として柏原屋清右衛門が出したのは、宝永・享保頃と考えられている。欠本なく揃っているものは珍らしい。

三〇　竹取物語　一巻一冊

江戸初期（寛文頃）写、奈良絵本。縦二九・六糎、横二二・五糎。金糸で花を織り出した茶色緞子の表紙、題簽なし。見返し本文共紙。用紙は間似合紙風の鳥の子。挿絵は二一面十八図、墨付紙数六十九丁。遊紙巻首一枚。毎半葉十行。一行十七〜八字。字面高さ約二十三糎。

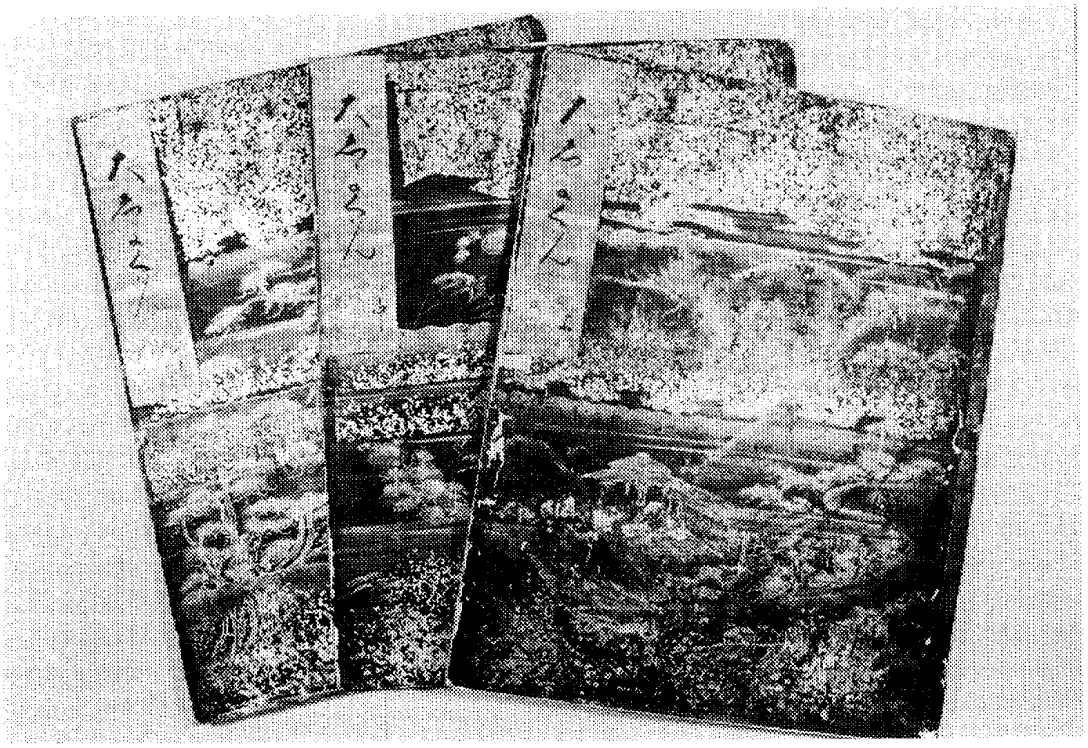
「今はむかし竹とりのおきなといふもの有けり野山にましりて竹をとりつゝよろつの事につかひけり名をはさかきのみやつことなんいひける其竹の中にもとひかる竹なん一すち有けりあやしかりてよりてみるにつゝの中ひかりたりそれをみれは三すんはかりなる人いとうつくしうてゐたり」ではじまり、「そのよしうけ給はつて兵者もあまたくして山へのほりけるよりなんその山をふしの山とは名つけけるそのけふりいまた雲の中へたちのほるとそいひつたへたる」で終る。



三一　大職官　　三巻三冊

江戸初期（寛文頃）写、奈良絵本。縦三二・六糎、横二五・三糎。金泥および金切箔散らしの表紙、見返しは間似合紙に金箔を押す。題簽「大しよくくハん上（中・下）」。用紙は鳥の子。毎半葉十行。一行二十一字前後。字面高さ約二十一糎。紙数上巻十八丁、中巻二十二丁、下巻十七丁。挿絵上巻六面五図、中巻五面四図、下巻七面六図。上巻は「それわかてうと申はあまのこやねのみことのあまの岩戸ををしひらきてる日の光もろともに春日の宮とあらはれてこつかをまほり給ふなり」ではじまり、中巻は「去程にまんこはみかたのくんひやうともをちかつけてとてもかなはぬものならはしゆらか大将四五人そこのみくつとなしてこそいこくのきこえもしかるへけれ我とおもはん人々はともをしてたへやとてこんかうかいのまんたらたいさうかいのまんたら両かいしよそん一千二百よそんのまんたらをろうにかけてふきそらしふなそこよりも名馬ともそのかすあまたひきいたす」から始まり、下巻は「大しよくはんみちすからおほしめすはさもあれむねんなるものかな三こく一のてうほうをわかてうのたからとはなさすしていたつらにりう宮のたからとなしけんく

ちおしさよ」に始まり、「しやしんのれいさうしやくせんたんのみそきにて五寸のしやかをつくりこめなか



ら方八寸のすいしやうのたうのなかにおさめむけほうしゆとなつけ三こく一のてうほうりうわうのおしみ給ひしことはりとこそ聞えけれ」で終る。幸若舞曲「大職冠」と殆んど異同はない。

三二　鞍馬ときは　　一巻一冊

江戸初期（寛永頃か）写、奈良絵本。縦一七・八糎、横二五・四糎。打曇表紙、金箔散らし。本文鳥の子袋綴。表紙中央に題簽「鞍馬ときハ」（縦十四・七糎、横三・三糎）。毎半葉十六行。一行約十六字。字面高さ約十三糎。紙数十二枚、挿絵五面三図、巻首に朱筆で「一巻」とあり、「さるほとにときはこせんはほとなくきよもりになひき給ひけり」で始まり、「けに女をゑらみいたさるへきにさたまらはにようゐんの御はかときちしやうてん女もろともに御てらをいたしおはしませみつからも御ともしてへちにてらをむすんてあんちせんはいかにやへつたうとこそおほせけれ」で終る。幸若舞曲「常盤問答」を奈良絵本に仕立てたものである。従って、舞曲の本に見られる、「詞」「サシクトキ」その他の音曲符は、もちろん存在しない。長文に

わたる異同はないが、小さな異同は多い。次に、黒木祥子氏が「舞曲『常盤問答』について」（「語文」三五昭54・4）で諸本分類の目安とした五箇所の本文を参考までにあげておこう。

(1) 今若殿と乙若殿の落着き先の寺の名

いまわか殿はたいこのてら、おとわか殿をはをんしやうしへこそあけられけれ（2ウ）

(2) 東光坊の語る釈迦の修行時代の師の名前

たんとくせんにとちこもり、あし仙人をしとたのみ、なつみ水くみ、つまきとり（5オ）

(3) 在俗時代の釈迦の后と御子の名前

ほとけもむかしはほんふにて、太子とおはせしそのときは、三人のきさきおはします、一をはやしやたらによ、二のきさきをはいきとて、さうなく人にみせられす、たい三にくたみとて、ことにようかんひれいなり、その三人の御中に御こあまたおはします、ちやくしをはらこら太子、つきにせんしやくひくなりき、やしやたらにより申は……（10ウ）

(4) 東光坊の語る鞍馬寺縁起のうち開山の名

めうらく大しの御こんりう（12オ）

(5) 東光坊と常盤の最初のやりとり

ときはきこしめされて、こなたの事をおほせける、もとよりくちの女にて　しらてまいりて候そ、をしへてたへとそおほせける、とうくわうきこしめし、けにとしらすはをしゆへし、それしやかほとけと申は……（4ウ・5オ）

本書は全体としては、幸若系ではなく、大頭系（読本）に近い詞章を有するといえよう。

［翻刻］大島龍彦「鞍馬ときハ」（「やごと文華」1、昭和56年5月）

三三　つきしま　　二巻一冊

江戸初期（正保・寛文頃）写、奈良絵本。縦三一・三糎、横二二・四糎。紺色表紙、金泥草花模様。見返しは本文共紙に金切箔をおく。用紙は間似合紙。毎半葉九行。一行二十二字前後。字面高さ約二十七糎。紙数三十七丁、挿絵十七面十四図。挿絵の中に本文が書かれる古い形を示している。

巻首の一丁を欠く。笹野堅『幸若舞曲集本文』（一五二頁）に掲載する大頭左兵衛本で次に補っておく。

中昔の事かとよ。其比平家の大将をば。あきのか

み清盛と申奉る。御出家あつて浄戒とこそ申けれ。有時一門連坐のざしきにての給ひけるは。夫人の世にあるしるしには。大願をおこし。或は国をあらためりさむくわうや（里山）を名所となし。たみすなをなるまつりことを末代のかたみとする也。天下のしきししきやうを。わがまゝにふるまふといへと。平安城のこうりうは浄戒がわざならす。然にかの平の京は。さしやうりうう（左青龍）びやっこ（右白虎）。せむしゆしやくごけむむ。しじん相応の地をしめし。北にはたゝすあむはじ。きぶねのおくよりながれ出る水のゆくゑを白川や。東山に三井寺。しゝの谷のみねつゞき。きもむにひゑい山。伝教大師のさうさうたり。南に男山岩清水と名付。和光のかけ雲なくはくわうほうそをしゆごし給ふ。西山のふもとに。松尾と法輪寺。亀山のおくよりながれ出る清瀧を。大井川と名付。末をばかつら川といふ。仁わ寺おむろ広龍寺。仏」法ごしの此京にてたえする事あるまじい。

右の「仏」までを欠く。

三四　判官みやこ物語　五巻存四冊

元禄頃刊。縦二五・五糎、横一八・四糎。鶯色原表紙。改題簽「判官みやこ物語　一（〜五）」。内題「判

官みやこ物語　一（～五）」。第二冊を欠く。楮紙袋綴。

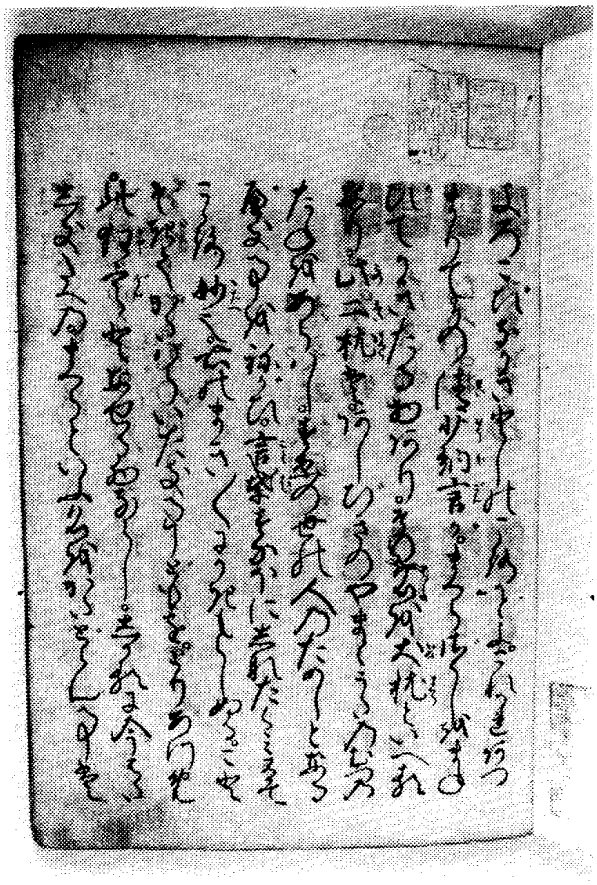
四周単辺。毎半葉十二行、一行二十字前後。

『室町時代物語大成』第十二所収「判官みやこはなし」の解説によれば、本書は「寛文十年庚戌正月吉辰　林市三郎開板」の刊記を持つ『判官みやこはなし』五冊の改題覆本であり、原題簽は「鬼一三略巻　判官都物語　義経千本杉幾之巻」とあったもので、本文、挿絵ともに林市三郎版の、かぶせぼりである。本書と同じ秋田屋版は、国会図書館と大洲市立図書館に存する。

三五　尤の双紙　　合一冊

寛永十一年刊。縦二七・五糎、横一八・九糎。布張り褐色改表紙、改題簽「尤乃双紙二冊合巻」。楮紙袋綴、匡郭なし、字面高さ二一・五糎。毎半葉十行、一行二十一字前後。序跋あり。紙数上巻三十八丁、下巻四十三丁。第四十四丁オモテに、跋と刊記「寛永甲戌六月吉日書舎中野氏道伴刊行」あり。

本書は鳥丸広光の随筆といわれ、上巻四十項、下巻四十項よりなる。



三六　竹斎　　三冊

延宝五、六年頃刊。縦二七・〇糎、横一八・七糎。藍色原表紙、卍つなぎ唐草模様空押し。改題簽「竹斎　上（中・下）」とあるも、版心は「竹　一（～四十一終）」までと三冊を通しての丁づけとなっている。第四十一丁ウラに「大伝馬三町目／鱗形屋板」の刊記あり。挿絵は全部見開きで十三箇所、全盛期の菱川師宣といわれる。本書は伝本の極く稀なる原刻本である。

第一冊の首に「待賈堂」（達摩屋五一）、「嶺韻」（リチャード・レイン）、「天幸堂」の朱印があり、同

じく第一丁の天に、小判形の内に烏を収めた淡島寒月の黒印がある。また各冊巻末に「江戸四日市／古今珍書斎／達摩屋五一」の朱印他がある。本書は反町弘文荘による、戦後フランスからの里帰り本の一つである。

三七　嶋原記　　三冊

明暦・寛文頃刊。仮名草子。縦二六・四糎、横一八・七糎。藍色無地麻模様空押し。原表紙。改題簽「天草軍記（入）上（冊物）」（中・下）　内題「嶋原記巻上（中・下）」。楮紙袋綴。毎半葉十二行。一行二十字詰。紙数上巻二十七丁、中巻二十四丁、下巻三十四丁。刊記なし。

本書は寛永十四、五年の、いわゆる島原の乱について「唯おろかに見聞し事を。露もかさらずありのまゝに」書いたものと序に語っているが、実録の『天草軍物語』とは趣きを異にしている。

印記に「松濤館」朱印。「宝玲文庫」印、「アカキ」（赤木文庫）印あり。

三八　浮世ばなし　　五巻五冊

寛文十年刊。縦二七・一糎、横一八・六糎。藍色表紙原装、卍つなぎ牡丹模様空押し。原題簽「絵入うき世はなし一（〜五）」。楮紙袋綴。四周単辺。毎半葉十二行。一行約二十一・二字詰。版心「浮世巻幾（丁数）」。紙数、巻一・十八丁、巻二・十六丁、巻三・二十丁、巻四・十二丁、巻五・十二丁。挿絵、巻一・七面、巻二・四面、巻三・七面、巻四・五面、巻五・四面、計二十七面。

本書『絵入うき世はなし』は江戸版であり、作者浅井了意の自筆版下本（日比谷図書館蔵『浮世物語』）ではない。巻頭に

浮世はなし

とあって、「今はむかし国風のうたにいな物ぢやここはわれのものなれどままにならぬは」云々の序文がある。続いて

浮世物語巻第一目録

一　浮世坊なりたちの事

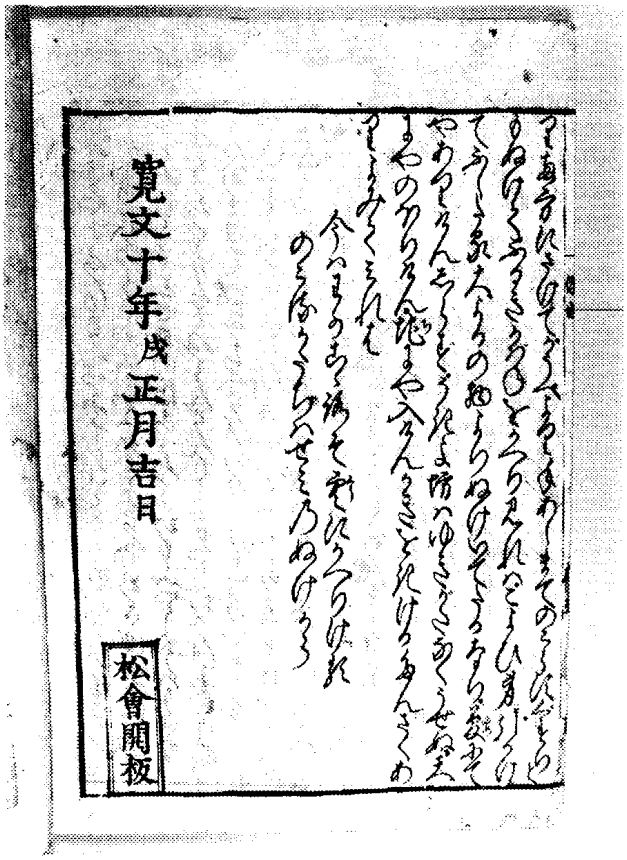
二　博奕の事

のような目録がある。第五巻巻末に、

寛文十年戌正月吉日　　松会開板

の刊記がある。本書は、寛文初年版と思われる『浮世物語』の改題本であり、挿絵を日比谷図書館蔵『浮世物語』のそれと比較すると、題材・構想は同じながら、絵柄が全く違うことが北条秀雄氏によって調査されている（『改訂増補浅井了意』）。なお、本書は赤木文庫旧蔵本で近世文芸資料類従・仮名草子編』第十二巻所収の影印本の原本である。同書に深沢秋男氏の詳細な解題がある。

寛文十年江戸松会板としては、本書の他に吉田幸一氏蔵本（巻二・三・四）がある、が完本は本書のみ。



三九　日本永代蔵　六巻六冊

貞享五年刊。縦二六・〇糎、横一八・五糎。藍紙表紙、原題簽「日本永代蔵一（〜六）大福新長者教」。楮紙袋綴、四周単辺、毎半葉十三行。一行二十五〜三十字詰。内題「本朝永代蔵」。版心「大福長者教　巻幾（丁数）」。紙数、巻一・十九丁、巻二・二十丁、巻三・十九丁、巻四・二十丁、巻五・二十丁、巻六・十七丁（たゞし九丁東欠）。挿絵、巻一・八面、巻二・八面、巻三・十面、巻四・十面、巻五・六面、計四十四面。刊記は

京　書林　二条通麩屋町　金屋長兵衛
江戸　神田新革屋町　西村梅風軒
貞享五戊辰年五月吉日
大阪書肆　北御堂前　森田庄太郎刊板

とある。崇文軒森田庄太郎は御堂前の「草紙や」で元禄元年に『日本永代蔵』を刊行している。刊記の右に『堪忍記　八冊』の広告がある。

本書の挿絵は吉田半兵衛筆といわれる。同版本は静嘉堂文庫、神宮文庫、国会図書館等にある。古典文庫（第一〇八冊）に複製本がある。

四〇　一目玉鉾　四巻四冊

元禄二年求版。縦二六・〇糎、横一八・三糎。藍色表紙、題簽欠落、打付書。楮紙袋綴、四周単辺。版心

「一目玉鉾巻幾（丁数）」。紙数、巻一・二十五丁、巻二・十九丁、巻三・二十四丁、巻四・二十一丁。毎半葉十五・十六行。一行二十三・四字詰。

刊記は

元禄弐年巳正月吉日

とあり、書肆名はない。元禄二年初刷本は次に

大阪高麗橋心斎橋筋南入町

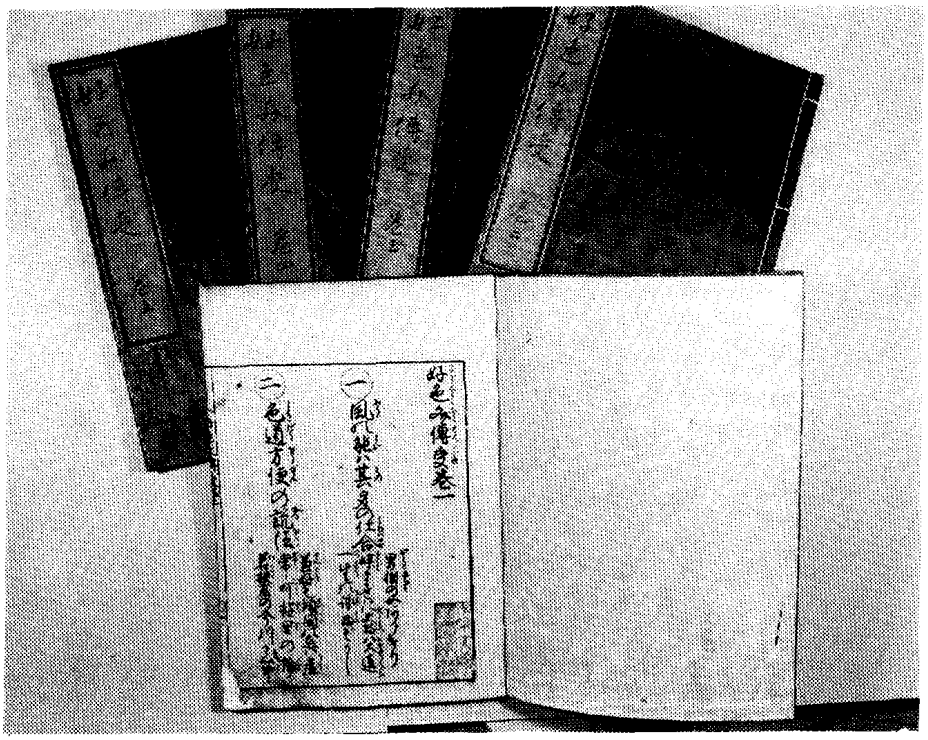
鴈金屋庄左衛門板

とあるので、本書は『定本西鶴全集』第九巻解説にいうところの、初版本の求版再刷の二に相当しょう。挿絵の筆者は未詳。水谷不倒氏は『一目玉鉾』は「本文以下奥附の年月書肆の名まで西鶴の自筆であるが、序文だけは別人である」という。

四一　好色文伝授　五巻五冊

元禄十二年刊か。由良軒政房著。縦二五・五糎、横一八・〇糎。紺色表紙、原題簽。楮紙袋綴、四周単辺。毎半葉十一行。一行二十～二十五字詰。版心「好色文伝授巻幾（丁数）」。紙数、巻一・十七丁、巻二・十七丁、巻三・二十一丁、巻四・二十一丁、巻五・十七丁。挿絵、巻一・六面、巻二・六面、巻三・五面、巻四・六面、巻五・五面、計二十七面。

刊記なし。吉田幸一氏蔵本は元禄十二年の刊記がある。吉田半兵衛画という。『江戸時代文芸資料』第四巻に翻刻されている。



四二　契情お国歌舞妓　　五巻五冊

享保十五年刊。縦二四・〇糎、横一七・六糎。黄褐色原表紙、原題簽「新板絵入契情お国讃妓　一之巻（〜五之巻）」。内題「契情お国讃妓　一之巻（〜五之巻）」。楮紙袋綴、毎半葉十二行。一行三十字詰。版心「一之巻（〜五之巻）哥舞妓　丁数」。紙数第一巻二十八丁、第二巻二十六丁、第三巻二十八丁、第四巻二十七丁、第五巻二十八丁。第一巻に「作者其磧／自笑」の「享保十五戌の年の始」の序あり。第五巻巻末（二十八ウ）に「享保十五戌ノ正月吉日／ふ屋町通せいぐハんじ下ル町　八文字屋八郎衛門板」の刊記あり。

第一冊表紙右下に六角形の「三柳／杉浦氏／蔵書記」の藍色蔵書票貼添、第一〜第四冊見返しに同型の朱印、第五冊見返しに異種の同氏朱印あり。

四三　寝惚先生文集初編　　二巻一冊

明和四年刊。縦一六・〇糎、横一一・二糎。鶯色原表紙、題簽欠落。内題「寝惚先生文集初編」。楮紙袋綴、四周単辺。毎半葉有界八行、一行十四字詰。版心「巻之一（二）　丁数」。明和丁亥秋九月／風来山人題紙「蔦堂」および「濟南郭　木子服撰」なる序の次に目録・本文あり、附録として奥北海天民著という「病目銭神論」と「物茂（もの）らい題（たい）」なる跋あり。刊記「曽釜田部惣

太著／明和四年秋九月大叶／東都書肆　切抜屋小文次／皇都書林　嘉隆屋才七／浪華書房　初編屋文十郎」京都の銅脈山人（畠中頼母）と相呼応して太田蜀山人が江戸で出版した狂詩集の一。

四四　西行上人談抄　一冊

万治頃刊。縦二二・八糎、横一五・三糎。藍色原表紙。題簽欠落。内題「西行上人談抄」。楮紙袋綴、四周単辺、版心「西　丁数」毎半葉八行、一行十四～十六字詰。紙数二十六丁。

巻末に

此一帖了俊相伝早
蓮阿俗名尾崎次郎満良
林前和泉掾時元板行

の刊記あり。

四五　新古今和歌集　二十巻二冊

室町中期写、伝足利義政筆。縦二四・八糎、横一七・〇糎。唐草模様織り出し金襴表紙、左肩に朱色地金泥模様で「新古今和歌集・上（下）」と書かれた原題簽がある。見返しは絹地に金銀の雲形模様。本文鳥の子列帖装、毎半葉十行（序は八行）。和歌一首一行書き。本文を『国歌大観』と比較すると、その一六二の歌の次に「恋しくば」の、九〇四の歌の次には「浪の上」の、九一一の歌の次には「なおきば」の歌がある。また、大系本にある一七〇、一五五三、一七三五、一七八三、一八〇一、一九一四の六首は本書に見えない。本書は漆塗り時代箱に収められている。古筆の極札が二つある。

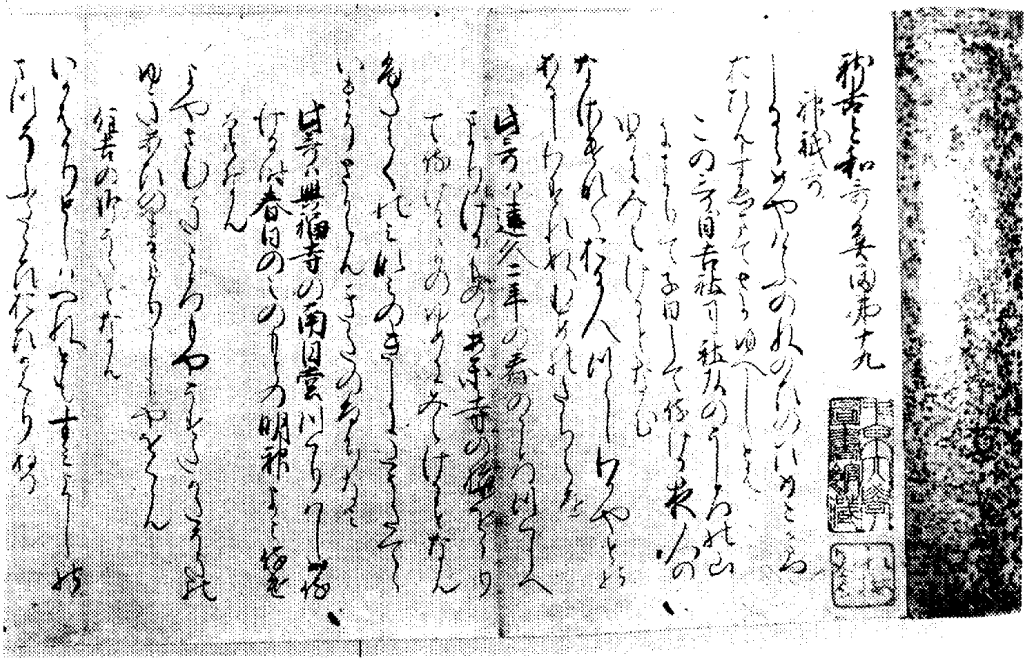
四六　新古今和歌集　二十巻存一冊

室町中期写、縦二四・七糎、横二一・〇糎。淡黄色太織布表紙による改装。題簽欠落。楮紙袋綴。毎半葉十二行（序も同じ）。和歌一首一行書き。

本書は巻七「池水の」（大系本七二三番）の次、六条右大臣歌の詞書までの残欠本である。大系本と比較すると、巻一22「いづれをか」の歌、同91「しら雲の春はかさねて」の歌を欠き、また順序が異なる歌が多い。虫喰がある。

四七　新古今和歌集　一軸

鎌倉時代末・南北朝写。縦二一・五糎、横三八二糎（一四糎前後の紙二七枚）。新古今和歌集巻第十九神祇



歌の一軸である。一枚十行、和歌一首二行書き。大系本と比較すると、例えば六巻番の詞書「伊勢物語に、住吉に行幸のとき、おんかみ下行したまひてとしるせり」を、「伊勢物語ニ住吉ニ行幸」とするなど、簡潔な表現が見られる。

末に次のような識語がある。

此神祇哥一巻阿佛
筆跡無疑一覧之時
依所望書之訖
元禄元年嘉辰
羽林藤原為綱

首に「紅梅文庫」朱印がある。時代の木箱入り。箱には「園林蔵収伝来品 印」の紙片貼添。印は「尚勝之章」とある。

四八　万葉抄出百首　一冊

室町末期写。縦二三・〇糎、横一六・〇糎。改装茶色表紙。題簽欠。内題に「萬葉抄出百首」とあり、一二一首が抄出され、次に「萬葉抄出」とあって七三首が抄出されているが、前者の七二首目から九二首目ま

での三丁分は後者に入るべき錯簡である。楮紙列帖装。毎半葉九行。字面高さ二十・五糎。漢字平かな交り、墨付四〇丁、さらに「連歌秘伝抄」の序と八躰の部分が漢字片カナ交りで二丁書写されている。国会図書館蔵の一本と同文であり、残欠ながら貴重といえよう。

「万葉抄出百首」の冒頭は、

みれとあかぬ吉のゝ川のとこなめにたゆることなく又帰りこん

吉野に行幸の時人丸哥也。とこなめハ常になめらかなりとほめたる詞也。御幸のおりふしなれハ、河の絶ぬことくいく世までも帰りこんと祝言の心也と云々。（①—三七）

であり、最後は

ふなきほふ堀江の川のみなきハにきゐつゝなくハ時鳥かも

ふなきほふハ船よそひといふ心也。ほり江ハなにハほり江なり。みなきハゝ汀とおなし。（⑳—四六二）

である。また、「萬葉抄出」の冒頭は、

君かため山田の澤にゑくつむと雪けの水にものすそぬらす

ゑくとハ芹のおさなきを申候。たゝわかなのたくひと心得玉ふへくや。雪けの水ハ雪消の水也。もハ衣裳なり。きみかため辛身せるよしをいへるなり。（⑩—一八三九）

であり、最後は

とほつ人まつらの川にわかゆつる妹かたもとを我こそまため

遠つひとハまつといはんためにをけることは也。松浦川ハつくし肥前国也。わかゆか（マヽ）ハ若鮎なり。たもとをまくとハ袖をかハしかたらふよし也。松浦仙人の哥也。（⑤—八七七）

となっている。

〔参考文献〕宮田正信「中京大学本万葉古注考」（「中京国文学」6　昭和61年3月）

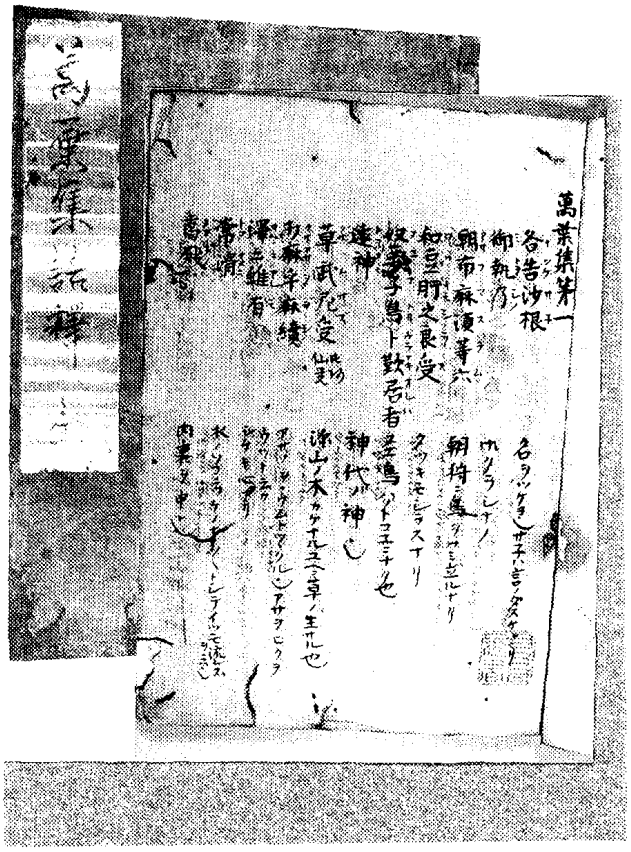
四九　万葉集語釈　一冊

江戸中期写。縦二六・一糎、横一九・〇糎。原装藍表紙、刷目模様。原題簽「萬葉集語釈　全」。楮紙袋綴。毎半葉十二行。字面高さ十九・五糎。奥書・識語なし。墨付紙数六十四丁。万葉集二十巻の難語の訓と義を記したもの。巻末に「万葉集語釈第二十巻」とあり。冒

頭の三行を記すと次のようである。

名告沙根（ナツケサネ）　名ヲツケヨ也サネハ言ノタスケナリ
御執乃（ミトラシノ）　御タラシナノ
朝布麻須等六（アサウマスラム）　朝狩ニ鳥ヲフミ立ルナリ

黒および朱ペン字による書込みあり。



五〇　百人一首抄　　合一冊

寛永頃刊。縦二七・九糎、横一八・五糎。鶯色原表紙。題簽打付書「百人一首抄　全」。内題「百人一首抄上（中・下）」。楮紙袋綴、天地単辺。版心「百人一首抄上（中・下）　丁数」。毎半葉十一行。一行二十六字詰。紙数上巻三十三丁、中巻三十七丁、下巻三十五丁。巻末に跋あり、末尾に

干時慶長元暦臘　日対雪夜之寒灯
敲窓下之凍硯記之

とある。

五一　六家抄　　二巻二軸

室町中期写。紙面高さ二七・二糎。もと楮紙袋綴二冊本（上巻六十五丁、下巻六十一丁）を江戸時代に巻子本に改装したもの。本書は江戸幕府老中松平定信旧蔵本である。『六家抄』は六人の新古今歌人の歌をそれぞれの家集の歌を中心に抄出し、春夏秋冬恋雑に分類したもので、永正二年（一五〇五）頃の撰にかかる。

本書は巻末に、

右両冊愚老令抄出也　加校合
畢
牡丹花
（花押）

の肖柏識語を有する。東大国文研究室甲本は永正六年友弘（宗訊）書写本（肖柏識語あり）であるが、本書では「月清抄」春の部の第十一首目に「桜さく比良の山かせ吹まゝに花になり行しかのうら波」を置くのに対して東大甲本は同歌を「月清抄」春の部の最後、つまり第六十九首目に位置させるのをはじめとして、両書の間には異同がある。

古い箱裏に「この六家抄ハ牡丹花肖柏か自筆也／六家集より得意の秀逸をみつから撰／出せしものなれハことにめつらしと／先公珍襲したまひき是も御遺愛の一つ／なり　田内親輔謹識」とある。田内は松平定信の側近で、遺書・遺稿等の整理にあたった人物である。

五二　建礼門院右京大夫集　一巻一冊

江戸初期写。縦二四・一糎、横一七・九糎。紺地草花模様金泥書きで上下に金箔を散らした表紙の左肩に朱色鳥の子題簽があり、「建礼門院右京大夫集」とある。見返し、金箔摺出し亀甲模様。本文鳥の子列帖装。毎半葉八行。歌は字面高さ約十九糎、詞書の部分は約十六・五糎。墨付紙数九十九丁、最終丁は世尊寺系図。遊紙は巻首一枚、巻末三枚。奥書・識語なし。

内題はなく、墨付第一丁表八行に亘って、いわゆる序文に相当する第一番の和歌を書いている。和歌は詞書よりも二字分上っている。詞書は一行十二字〜十八字。本書は、井狩正司氏による分類（『建礼門院右京大夫集校本及び総索引』）を参照すると、第五類本　d日本大学図書館所蔵本　に最も近い。

本書の特長を二、三列挙すると

(1)　序文の詞書に相当する部分のみが第一丁表に記されていること。

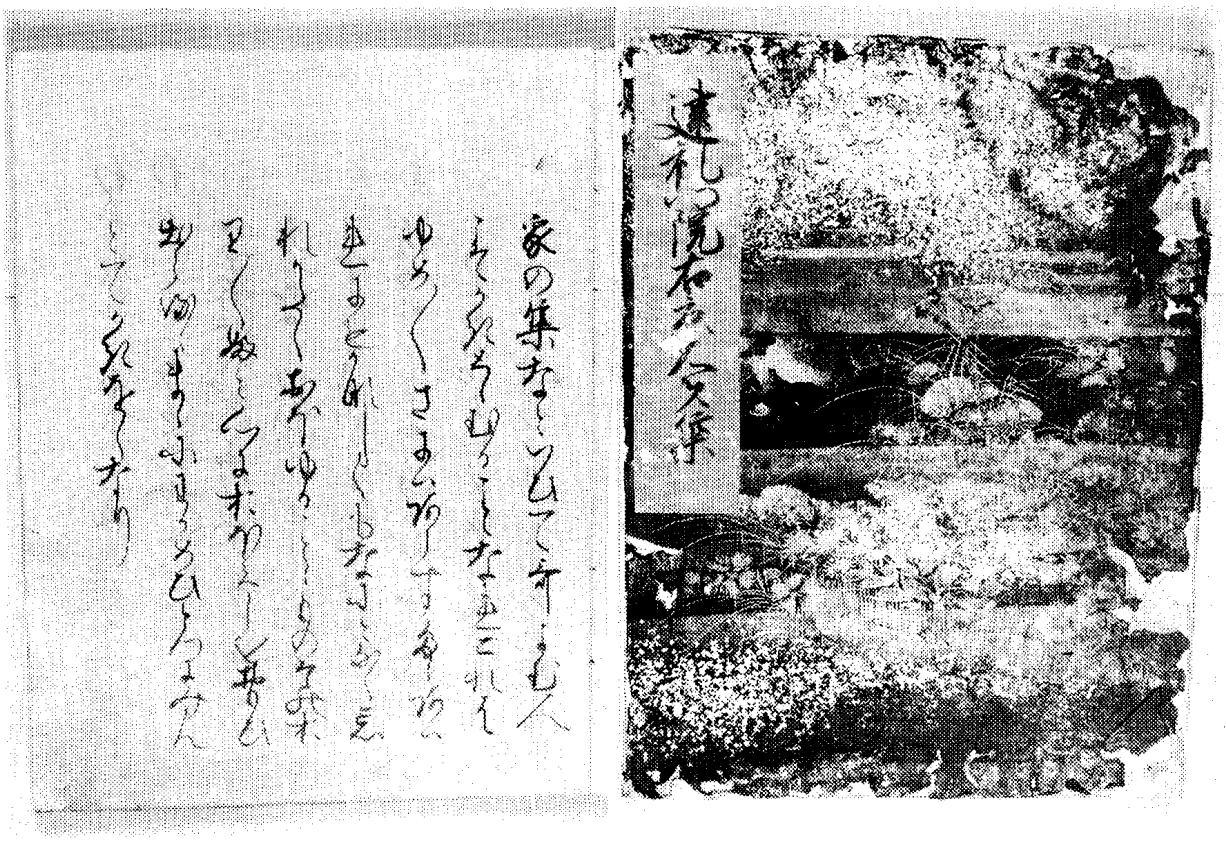
(2)　最終丁に世尊寺系図があること。

(3)　和歌は第一番「われならで」から第五三番「山里の」まで二行書き、第五四番以降が一行書きであること。

(4)　第二九番「たのめおきし」から第三二番「契おきし」までの四首を欠くこと。

(5)　天理図書館蔵本（竹柏園旧蔵本）その他の第五類本に欠く第二〇八番「うきうへの」の歌を持つこと。

となる。右の(1)〜(4)までの諸点は、本書が第五類本に属することを示している。(5)については井狩氏が調査



された第五類本五本のうちでは日本大学図書館所蔵本のみ第二〇八番の歌を持っている。また、氏があげた(5)を含む九箇所の書入・校合のうち、本書は八箇所について日本大学図書館所蔵　本と一致し、両者が非常に近い関係にあることを示している。第五類本の中では「最も祖本に近い主流をなす伝本」とされた日本大学図書館所蔵　本は江戸中期頃の写本とされているので、この類の中では本書は最良の伝本ということになろうか。

五三　愚問賢注抄出　　一巻一冊

室町中期写。縦二〇・九糎、横一四・七糎。栗皮色表紙、斐紙列帖装。毎半葉十行。平仮名交り。一行二十一字前後。墨付五十四丁。遊紙、巻首、巻末に各一枚。飯尾善六郎為清筆の極礼が貼添されている。二条良基頓阿による『愚問賢註』の注釈書であるが堯恵注かどうか未詳。

五四　兼載連歌付合　一巻一冊

延徳三年写。縦一三・六糎、横二一・一糎。朱色表紙、題簽「兼載連哥付合」。楮紙袋綴。毎半葉十六行。字面高さ約十一糎。紙数二十一丁。

兼載

北野会所にて正月五日

けふひらく梅は千とせのかさし哉

をはじめにして五十三句目は

歳のくれに

鶯のなかぬそ冬木むめの花

とあり、次に十二行分の空白があって第四丁を終る。

ここまでは、金子金治郎氏が紹介された「兼載句艸」（『連歌師兼載伝考』八四〜九三頁）に同じである。次に、第五丁のはじめは

水せきいるゝを田のなはしろ

かはつなく月の山さと夜はふけて

から

いとまなく民のくるしむほとを見て

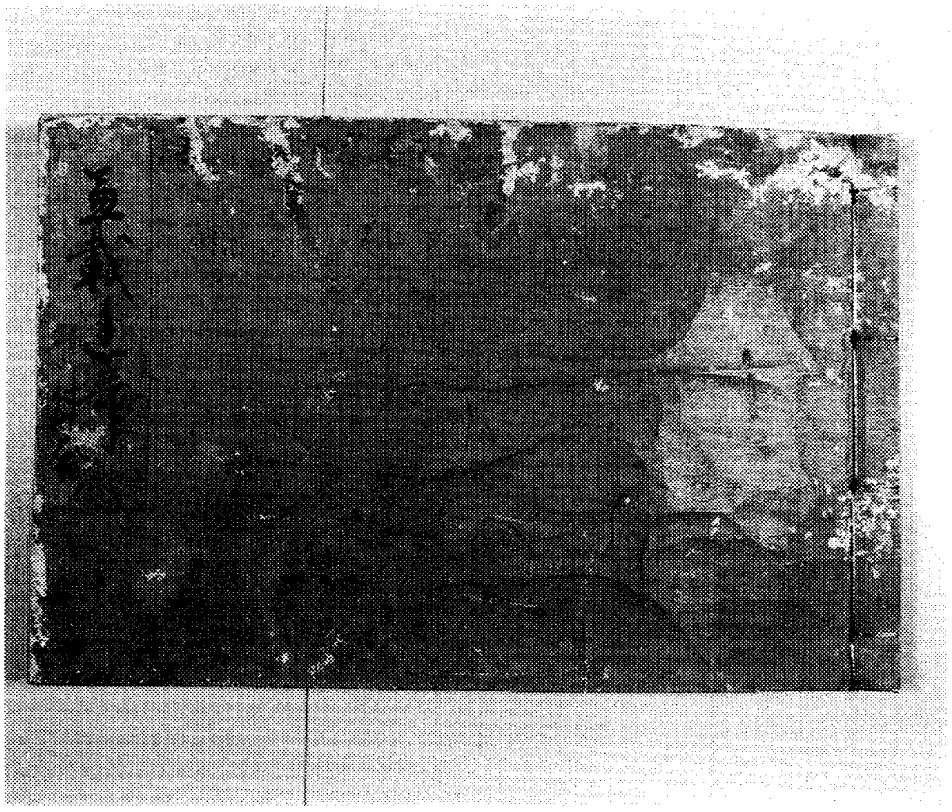
御幸のみちやまれになるらん

まで十六丁分の連歌が記されている。

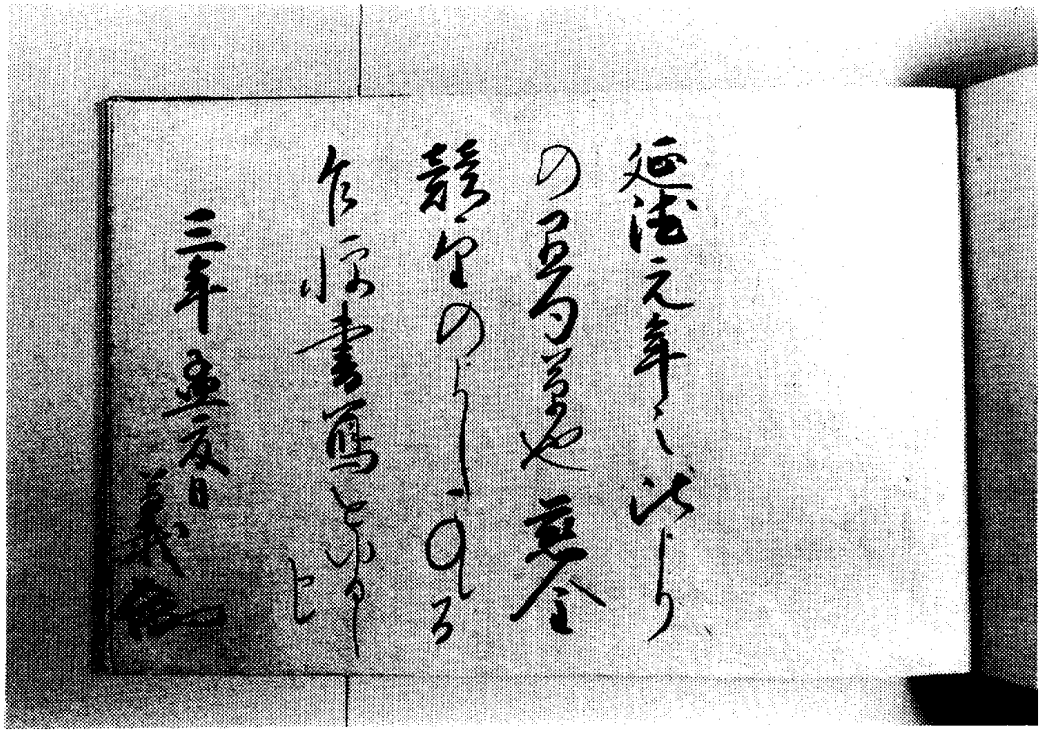
巻末に次の自筆識語がある。

延徳元年之比より

の愚句草也慈全



競望のよし承候間
乍憚書写をゆるし訖
三年孟夏日
兼載（花押）



これも「兼載句艸」の奥書と同じものである。本書は時代桐箱に収められ、蓋には「兼載連歌付合同人奥書有之」と墨書されている。

五五　連歌新式　一帖

室町中期写。鳥の子列帖装、小枡形本。外題「新式今案」とあり、「連歌初学抄」の抜書（一丁）および「連歌新式追加并新式今案等」（十六丁）から成る。応安五年の二条良基の奥書、享徳元年の一条兼良の奥書があり、次に「和漢篇」（一丁半）を載せ、文亀元年の牡丹花肖相の「永正六暦仲夏日　夢庵」とある奥書を記す。

巻末に次の識語あり。

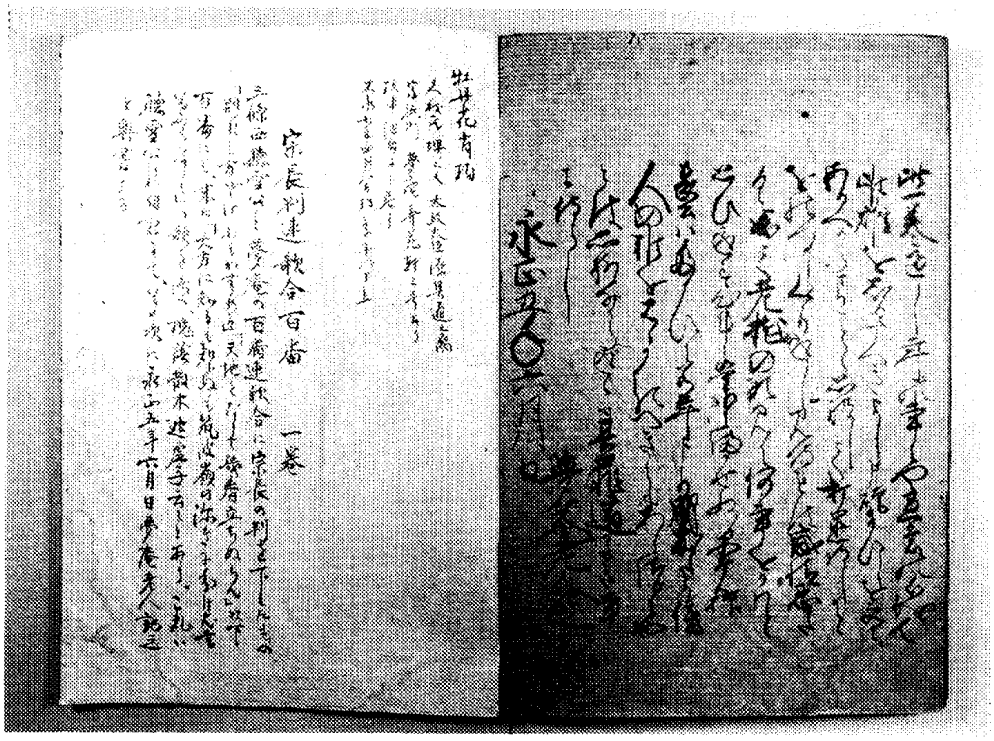
此一冊平入道兼純真跡也
元禄六年三月廿一日於奥
府仙台大島良設被授之
法眼兼寿

法眼兼寿は『狭衣物語抄』の著者として知られる猪苗代家第八代の当主である。大名家と関係を持ったこの時代の連歌師がそうであったように、伊達家に仕えた兼寿は連歌指南のために毎春仙台に下っている。兼純は兼載の嗣子で明応・永正頃の人。本書は「連歌新式」の有力な証本の一といってよかろう。

五六　宗長百番連歌合　一冊

室町末期写。縦二七・〇糎、横一八・八糎。改装表

紙。本文用紙は、茶褐色斐紙楮紙混漉。袋綴。墨付五十四丁。毎半葉十一行。字面高さ二十・五糎。巻末に「おほかたにしるもしらぬもつくは根のふかきにわけんことの葉もなし　槐陰散木逃虚子」と三条西実隆の



歌があり、更に「此一巻過し年の事にや……返々も其罪遁かたき事に侍らし　夢庵老人記之／永正五年六月日」の識語を有する。

本書は、三条西実隆、牡丹花肖相両人の判にかかる宗長百番連歌合である。巻頭一丁欠。一番に対する夢庵の判の「左の句、あめつちと成ていく春と侍る、太初よりの春をおもへる心かきりなし、たけたかくきこえ侍り、右又、玉をみがく春のみきりを、とるへくも見え侍らす、源氏物語にまして玉をみかける（おまへ云々）」『桂宮本叢書第十八巻連歌』所収「宗長百番連歌合」による）までを欠いている。

題簽に「牡丹花肖柏夢庵老人筆／宗長連歌合判」とあり、裏表紙左隅に「横山本」と墨書。横山重旧蔵本。

五七　季吟興行之巻　一冊

江戸中期写。縦一九・六糎、横二七・〇糎。後装表紙、楮紙袋綴。墨付丁数五十丁。一面十四行、字面高さ十四・〇糎。

本書は、北村季吟が京都東山の霊瑞院従高（俳号暫

酔）から古今伝授を受けた折の百韻である万治二年九月七日の「古今伝授章宴之会」から、寛文十三年八月廿八日、伊勢国一志郡久居城主、藤堂高通（俳号任口）を訪れて催した百韻興行まで、十二回の興行が収められている。『季吟廿会集』に収められていない興行もあり、万治・寛文年間の季吟門の動静を知る重要な資料である。

〔翻刻〕長谷川端・富田康之「翻刻『季吟興行之巻』」（『日本文学説林』昭和60年）

五八　新増犬筑波　二巻二冊

寛永二十年刊。上巻内題「あふらかす」縦一三・七糎、横二〇・六糎。無地栗皮色表紙。楮紙袋綴。無界。毎半葉十三行。字面高さ約十一・二糎。版心「新（丁数）」。紙数五十八丁。刊記なし。下巻内題「　新増犬筑波集淀川トモ号」、縦一四・一糎、横二〇・六糎。紺色卍つなぎ牡丹模様、題簽欠。楮紙袋綴、無界、一面十三行、字面高さ約十一・二糎。版心「新下（丁数）」紙数六十丁。

巻末に

右宗鑑の犬筑波の名句共
ながら今の初心是を手本
とせハ当時きらふ事をしり
給まじきゆへに同意用付
無誹言句共に判の詞を付
侍少もそしる事ハ侍らず
時代のかはる故也上手の位
ハ今の代に及者あるべから
す句躰こらせず殊勝筆
に尽かたし此次につかぬ句
共を無理に付て三句目の
やりやうの心持を若輩に
しらしむ計や山崎のそバ」60才
をとをりて行末ハ海にいづ
れハ此本ハ淀川と名付侍
一笑　　長頭丸

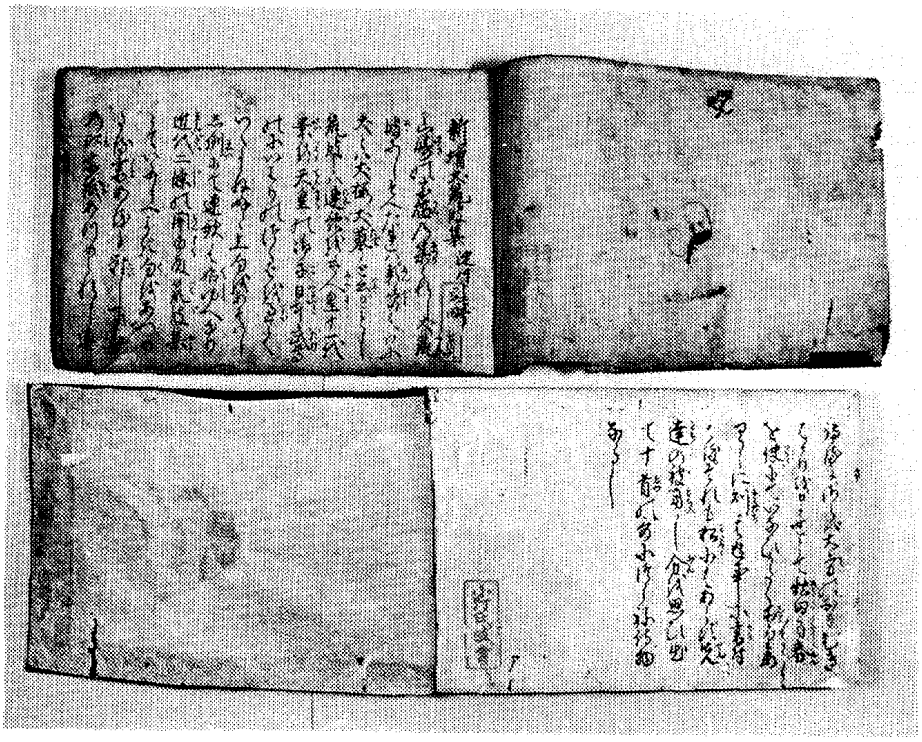
と跋があり、

二條寺町
寛永廿初春　　野田弥兵衛開板

の刊記がある。『貞門俳諧集』（日本俳書大系第六巻大正15）にいう

ように、松永貞徳（長頭丸）が『新増犬筑波』の外題で『油糟』を前に置き『淀川』を後に配して出版したものである。

両書とも、巻首に「岡田真」、巻末に「小汀氏蔵書」の朱印がある。



五九　おくのほそ道　　一巻一冊

元禄十五年刊か。縦一六・七糎、横一四・四糎。香色表紙、中央原題簽「おくのほそ道」。楮紙袋綴。無界。毎半葉八行。一行十二～十四字詰。字面高さ約一二・七糎。紙数五十四丁。

巻末に

此一書ハ芭蕉翁奥州の紀行にして
素竜の筆也書の縦五寸五歩横四寸
七歩紙の重五十三首尾に白紙を加ふ
外に素龍か跋有今之署行成紙の表
紙紫の糸外題ハ金の真砂ちらした
る白地におくのほそ道と自筆に書
て随身し給ふ遷化後門人去来か
許に有又真蹟の書門人野坡か許」54才
に有草稿の書故文章所々相違す
今去来か本を以て模写する者也

という跋文があり、空白があって左下に小さく、

京寺町二条上ル町
井筒屋庄兵衛板

とある。素竜清書本を透き写しにして板下としたもので、大系本の解説によれば、「不注意による六か所の

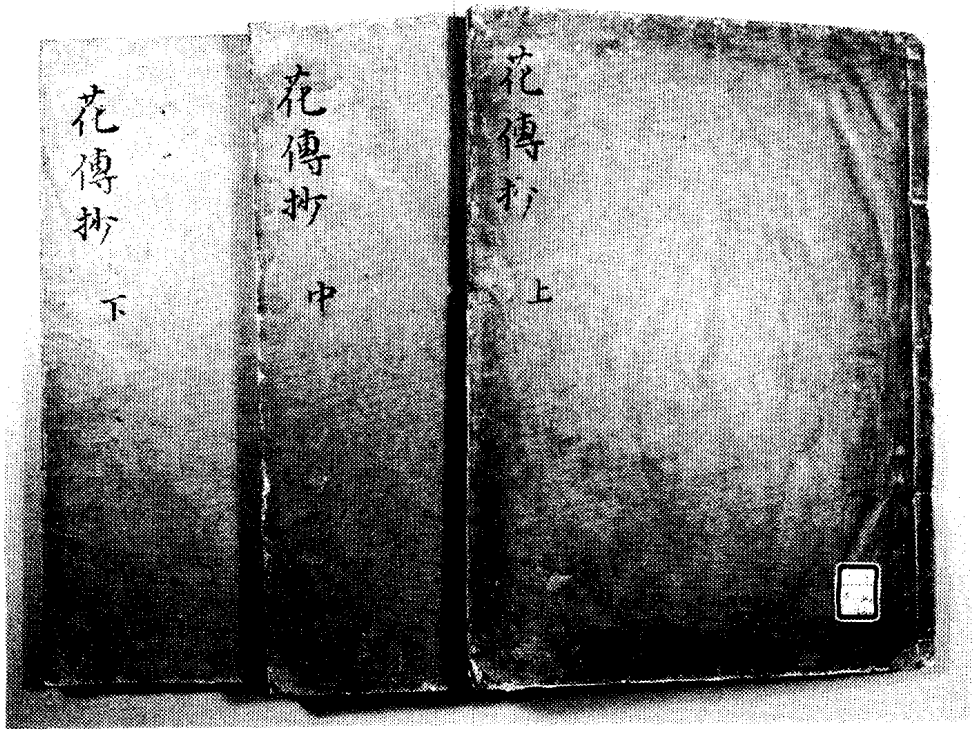
小異がある外は、書体、字配り等、全く素竜清書本に同じ」（一九頁）という。初板を元禄十五年とすることについては、杉浦正一郎氏『芭蕉研究』一八三〜四頁参照。

六〇　和漢朗詠集　　二巻存一冊

室町末期写。上巻欠。縦二四・一糎、横一三・七糎。茶褐色表紙、楮紙袋綴。表表紙および第一丁欠。毎半葉五行。一行十五字前後。行界、有界。縦一九・一糎、横一〇・六糎。片仮名附訓が詳細であり、朱点、朱引もある。後半に虫損が多い。

六一　花伝書　　八巻合三冊

元和寛永中刊、古活字版。縦二九・八糎、横二一・七糎。縹色表紙、薄手斐紙袋綴。無界、平仮名交り。毎半葉十二行。一行十八、九字詰。表紙右側に「花伝抄上（中・下）」と打付書。紙数上巻六十八丁、中巻七十八丁、下巻七十丁。『古活字版之研究』によれば、第二種イ版で、旧安田文庫本、大東急文庫蔵本と同版である。第一種イ版と初葉について比較すると第一種本「岩戸のかみ遊」→「岩戸の神遊」、「はじめ」→「はしめ」、「かぐら」→「かくら」のような違いがある。花伝書の古活字版は通行本の巻一・二・三を上巻



とし、巻六・七・八を中巻に、巻四・五を下巻に配している。

六二　謡　抄　　十冊

明暦頃刊。縦一八・九糎、横一三・四糎。藍色原表紙、波模様空押し。原題簽「謡鈔（曲名）（巻数）」のように各冊十曲合計百曲の鈔である。楮紙袋綴。天地単辺、十六・三糎。毎半葉九行、一行十七字詰。第十冊の巻末に「謡法音鈔　全部十冊／勧化法音辨類鈔　全部七冊」の広告の左に、「京都書肆／堀川通佛光寺下ル処／河南四郎右衛門」とあり。

六三　保元軍物語　　巻三（零本）

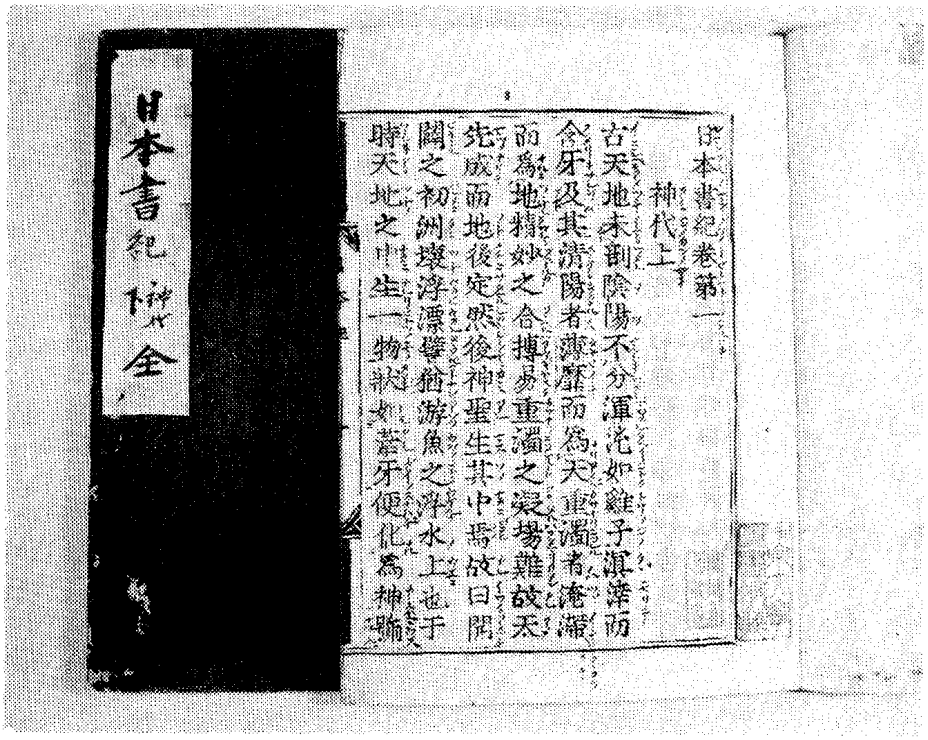
元禄頃刊。古浄瑠璃正本。縦二二・四糎、横一五・二糎。樺色無地原表紙。改題簽「保元軍物語」。内題「保元軍物語　三之巻」巻末一丁欠。毎半葉十七行、一行四十二字前後。四周単辺。版心は「保元ノ三　丁数」。本書はうろこがたや新板の「絵入・保元平治軍物語」（保元軍物語四巻・平治物語三巻）の第三巻である。『古浄瑠璃正本集』第八の解題によれば、七冊を揃えた完本は東京大学附属図書館のみで、他には慶応義塾図書館に一ノ巻、天理図書館に七ノ巻があり、また阪口弘之氏蔵の弐ノ巻・四ノ巻は挿絵に省略がある。本書には十箇所に挿絵があり、省略されてはいない。

六四　日本書紀神代巻　　二巻二冊

慶長中刊、古活字版。縦二七・三糎、縦一九・一糎。茶褐色表紙、楮紙袋綴。四周双辺、毎半葉八行。一行十七字詰、細字双行。版心「日本紀（丁数）」。紙数上巻四十五丁、下巻四十一丁。川瀬一馬氏『古活字版之研究』にいう双辺無界八行十七字別版本（『図録篇』九九〇番）であり、同種本は内閣文庫、龍門文庫にある。墨点つき。上巻末に左の墨書識語がある。

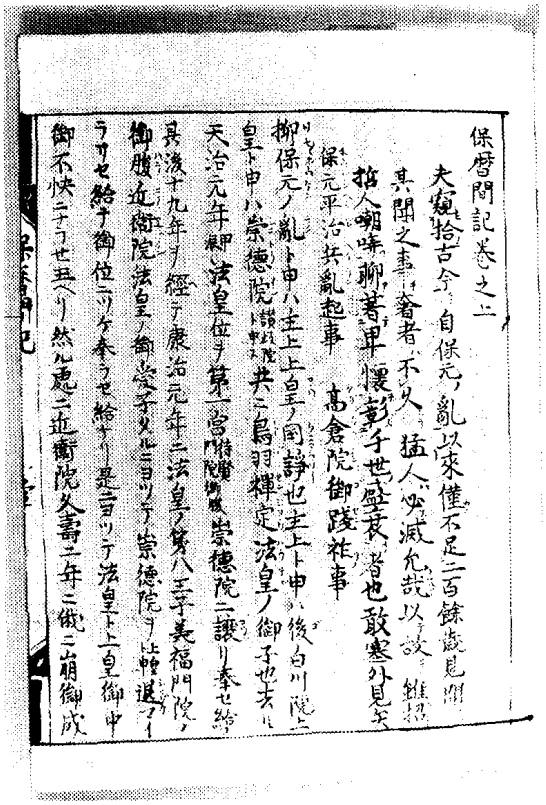
於朝熊岳是求点
元和辛酉年五月中旬　　主賢盛之
　　頼　賢

また、下巻末右下に「高盛」とあってこれを消し、左に「頼賢」とある。朝熊岳は宇治山田市の朝熊山金剛證寺であろう。



六五　保暦間記　　一巻一冊

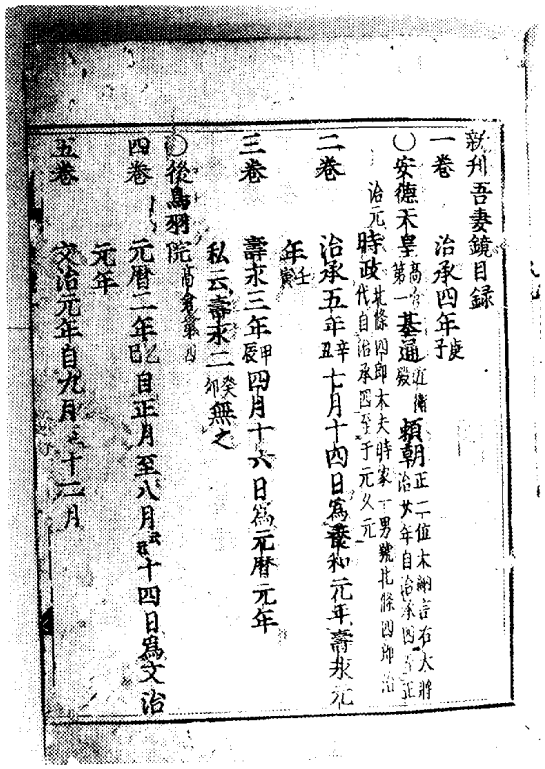
慶長中刊、古活字版。縦二七・六糎、縦二〇・〇糎。渋色表紙、楮紙袋綴。四周単辺。片仮名交り。毎半葉十二行。一行二十三〜四字詰。版心「保暦間記（丁数）」。巻首二枚は補写、紙数すべて七十二丁。巻末に「残花書屋」（戸川残花）朱印がある。同版本は静嘉堂文庫、蓬左文庫等に蔵す。



六六　東鑑　　五十二巻二十五冊

元和中刊、古活字版。縦二七・五糎、横三〇・〇糎。紺色原表紙。題簽「東鑑　一」、内題「新刊吾妻鏡巻第一（〜巻第五十二）」、版心「東鏡一（〜五十二）」

丁数」。楮紙袋綴、四周双辺、毎半葉十二行。一行二十二字詰。片仮名交り無訓本、朱による附訓あり。各巻巻頭に「岡田真之蔵書」朱印あり。三帙


新刊吾妻鏡目録
一巻　治承四年壬子
○安徳天皇　高倉第一基通　近衛　頼朝　正二位大納言右大将　治承四年自治承四至正治元時政　北條四郎大夫時宗十男號北條四郎　代自治承四至于元久元
二巻　治承五年辛丑十月十四日為養和元年　寿永元年壬寅
三巻　寿永三年甲辰四月十六日為元暦元年
私云寿永二癸卯無之
○後鳥羽院　高倉第四
四巻　元暦二年己巳自正月至八月廿四日為文治元年
五巻　文治元年自九月至十二月

六七　東鑑　五十二巻二十五冊

寛永元年刊整版。縦二八・九糎、横二一・〇糎。丹色原表紙。題簽「東鑑　目録一（～五十一之二）」。内題「新刊吾妻鏡巻第一（～巻第五十二）」版心「東鑑一（～五十二）　丁数」。楮紙袋綴。四周双辺。毎半葉十二行、一行二十字詰。附訓本。巻末に「寛永甲子之春／羅洞散人／林道春書（印）」の跋と「寛永三年三月日／菅聊卜刊正」の刊記あり。各巻々頭に「棚橋蔵書」朱印あり。二帙

六八　本朝遯史　二巻合一冊

寛文四年刊。林読耕斎（羅山四男）著。縦二五・七糎、横一八・一糎。褐色表紙、原題簽「本朝遯史」（下部に破れあり）。楮紙袋綴、四周双辺、毎半葉十行、一行二十字詰。版心「遯史巻之上（下）　丁数」。「寛文四甲辰年孟夏中旬／谷岡七左衛門板行」の刊記。

本書はわが国の隠逸者の伝記として最初のもので、序跋によれば、野間静軒の談話を契機にして成立し、読耕斎の没年（万治四年）から三年後に刊行されている。

六九　童蒙先習　十五巻二冊

慶長十七年有跋刊、古活字版。縦二八・二糎、横二一・一糎。栗皮色表紙、楮紙袋綴、四周単辺。毎半葉十二行。一行二十三字詰。版心「童蒙先習幾（丁数）」。

紙数上巻四十丁、下巻四十一丁。小瀬道喜（甫庵）の著わした教訓書で、よき物、あしきもの、やさしき物、いやしき物のような分類で記述されている。『図書総目録によれば、慶長十七年版とされるものは、桜山文庫旧蔵本である本書の他に、国会図書館、内閣文庫、京大谷村、慶大、岩瀬文庫、祐徳文庫などに存在が知られている。本書巻頭に「桜山文庫」朱印がある。

七〇　和歌食物本草　　合一冊

古活字版。縦二四・九糎、横一七・二糎。原装渋皮表紙。題簽欠落。内題「和歌食物本草巻之上（下）」。楮紙袋綴。毎半葉十二行、一行十七字詰。字面高さ一九・〇糎。紙数上巻四十四丁、下巻三十二丁。巻末に

寛永七歳庚午
十二月吉日　　開板

の刊記あり。

七一　西行物語絵巻　　存一軸

江戸初期写、巻子本。縦二五・〇糎、横約一三・五米。一枚二八・二糎前後の楮紙を用いている。絵は白描で稚拙であり、「板」「しゆすさけたるてい」のような書き込みは、親本の絵を写しながらの注記であろう。奥書・識語等なし。本巻は「西行一生涯草紙」と同一本文を持ち、「かくおこなひありくほとに、新院和哥を御このみありとて、中院右大臣の御奉行にて、恋の百首をめされけり、勅宣そむきかたきにゆへに六首の謌をつらねてまいらせあけたりけり」（読点は私による）よりはじまる。従って『史籍集覧』本の本文の約五分の一ほどの分量である。

讃岐の松山での、「松山のなみにながれて」の歌に続いて

まつやまのなみのこゝろはかはらしを
かたなくきみはなりましにける

の歌があり、また山峯のところで

いまは仏法の名字もきかぬ山の中に虎狼野干を
ときにて、かはかりの御すみかあはれになみたを
さへかたし
よしやきみむかしのたまのゆかとても

かゝらんのちはなにゝかはせむ

同国善通寺と申は、弘法大師むまれさせ給たりける所に心とまりて、いほりをむすひて二三年すみ侍けり、大師の御あたりなれは、はなれかたくおほえて

いまよりはいとはしいのちあれはこそ
かゝるすまひのあはれをもしれ

とあり、類従本との間に異同が見られる。さらに末尾に近く、「願はくは」の歌の後が類従本や正保刊本などと大きく異っているので、次に紹介しておく。

ねかはくははなのもとにて春しなん
そのきさらきのもちつきのころ

常此歌を詠して、ついに建久九年二月十五日ねかいのことく正念に住して、かの花のもとにて西方にむかひて、於此念終即往安楽世界、阿弥陀仏大菩薩衆囲遶住處と誦して、かくそよみける

仏にはさくらの花をたてまつれ
わか後の世を人とふらはゝ

取後百遍の念仏を申て、そらに伎楽のこゑきこえ、紫雲たなひき、廿五のほさつ蓮台をかたふけて往生のとけてけり

（菩薩来迎の絵あり）

西行か夫妻、あまはおとこにはまさりたるこゝろつよきものにて、廿三のとしかみをおろして、高野のあまのにこもりしよりのち、あひしたしき人のもとよりふみつかはしけれとも、返事する事もなくて、つねに無言にておこなひ、このむすめのあまを善知識にして、おはりのときおほして念仏申て、異香室にみちておはりけり、又むすめのあまは、父母にもまさりたりける心つよきものにて、一生不犯の身にて、正治二年のころ、紫雲たなひきて、往生とけてけり、さればつゐに三人おはなしはちすの身になりたることのめてたさあはれにたうとくそおほえける

（西行の妻と女念仏の絵あり）

そのころみやこに哥人のなみたをなかさぬはなかりけり、其中左近中将定家朝臣、菩提院三位中将のもとへ、西行往生の事申けるに

もち月のころはたかはぬそらなれは
きえけむ雲のゆくゑかなしな

返事

むらさきのいろときくにそなくさむる
きえけむ雲はかなしけれとも

そのつきのとしの二月十五日、西行すみける伊勢国の花を見て、沙弥宿念行専かもとへ申つかはしけるこそあはれにおほえけれ

なかめけむ人そこひしきさくらはな
このきさらきのころときくにも

返事

なきあとの春にちきりし二月の
たかはの月もにしへゆくかな

目次

一　塵滴問答　慶長中刊古活　一冊……1
二　新韻集　慶応三写　二冊……2
三　下学集　元和三刊古活　二冊……3
四　増補節用集　寛文五刊　七冊……4
五　鼇頭節用集　貞享五刊　合一冊……4
六　増益節用集大全　寛文頃刊　一冊……4
七　伊勢物語聞書　江戸初期写　一冊……4
八　闕疑抄　寛永一九刊　合一冊……5
九　源氏物語　南北朝期写　五十三冊……6
一〇　源氏物語　室町末期写　五冊……7
一一　源氏物語　江戸初期写　一冊……7
一二　源氏物語　明暦頃刊　二十五冊……7
一三　源氏秘抄　江戸初期写　十一冊……8
一四　狭衣物語　承応三刊　十六冊……9
一五　宝物集　慶長中刊古活　二冊……9
一六　栄花物語　明暦二刊　二十一冊……10
一七　保元物語　室町末期写　二冊……10
一八　平家物語　江戸初期写　四冊……12
一九　太平記　慶長元和中刊古活　二十冊……13

二〇　太平記　寛永元刊古活　四十一冊……13
二一　太平記賢愚抄　慶長十五刊古活　二冊……14
二二　太平記抄　慶長中刊古活　四冊……15
二三　太平記音義　慶長中刊　合一冊……16
二四　湊川物語　寛文頃刊　三冊……17
二五　曽我物語　江戸初期写　十二冊……17
二六　信長記　江戸中期写　十五冊……18
二七　関原軍記　江戸中期写　六冊……19
二八　文正草子　寛永頃刊　合一冊……19
二九　御伽草子　宝永・享保頃刊　二十三冊……19
三〇　竹取物語　江戸初期写　一冊……20
三一　大職官　江戸初期写　三冊……21
三二　鞍馬ときは　江戸初期写　一冊……22
三三　つきしま　江戸初期写　一冊……23
三四　判官みやこ物語　元禄頃刊　四冊……24
三五　尤の双紙　宝永十一刊　合一冊……26
三六　竹斎　延宝頃刊　三冊……26
三七　嶋原記　明暦・寛文頃刊　三冊……27
三八　浮世ばなし　寛文十刊　五冊……27
三九　日本永代蔵　貞享五刊　六冊……29
四〇　一目玉鉾　元禄頃刊　四冊……29

四一　好色文伝授　元禄頃刊　五冊……30
四二　契情お国歌舞伎　享保十五刊　五冊……31
四三　寝惚先生文集初編　明和四刊　一冊……31
四四　西行上人談抄　万治頃刊　一冊……32
四五　新古今和歌集　室町中期写　二冊……32
四六　新古今和歌集　室町中期写　一冊……32
四七　新古今和歌集　鎌倉末・南北朝期写　一軸……33
四八　万葉抄出百首　室町末期写　一冊……33
四九　万葉集語釈　江戸中期写　一冊……34
五〇　百人一首抄　寛永頃刊　合一冊……35
五一　六家抄　室町中期写　二軸……35
五二　建礼門院右京大夫集　江戸初期写　一冊……36
五三　愚問賢注抄出　室町中期写　一冊……37
五四　兼載連歌付合　延徳三写　一冊……38
五五　連歌新式　室町中期写　一冊……40
五六　宗長百番連歌合　室町末期写　一冊……40
五七　季吟興行之巻　江戸中期写　一冊……41
五八　新増犬筑波　寛永二十刊　二冊……42
五九　おくのほそ道　元禄頃刊　一冊……43
六〇　和漢朗詠集　室町末期写　一冊……44
六一　花伝書　元和・寛永中刊古活　合三冊……44

六二　謡抄　明暦頃刊　十冊……45
六三　保元軍物語　元禄頃刊　一冊……45
六四　日本書紀神代巻　慶長中刊古活　二冊……45
六五　保暦間記　慶長中刊古活　一冊……46
六六　東鑑　元和中刊古活　二十五冊……46
六七　東鑑　寛永一刊　二十五冊……47
六八　本朝遯史　寛文四刊　合一冊……47
六九　童蒙先習　慶長十七有跋刊古活　二冊……47
七〇　和歌食物本草　寛永七刊古活　合一冊……48
七一　西行物語絵巻　江戸初期写　一軸……48